

日替わり能力

ココリンク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

男、門脇健は気付いたら平原にいた。

そこで出会ったグロ耐性が皆無の剣士の少女、ホースイ・モニムと共に旅する冒険譚。

目次

一日目

生意気な女

1

ビバ！ビビンニ

21

能力

38

二日目

ホースイ・モニムの願い

55

透過の男

75

草原での一幕

98

一日目 生意気な女

俺は気づいたら、平原にいた。

何を言っているのか分からない気がするが、俺にも分からない。ただ、何度確認しても草しか生えない平原に俺は立っている。試しに頬をつねったら痛い。

これは夢ではない。

いったい、どうなっているのだ!?

「貴様、いったいなにをやっている?」

そのとき、俺の後ろから女の声が出たのだ。

チャンスだ、ここがどこか、その女に聞こう。

「すみません、ここは……………」

俺はそう言っ、振り向いた途端、パツと話すのをやめちまった。なにせその女、刀を持って俺に身構えてるんだぜ。

俺より一回り小さいくらいだが、貫禄っていうか殺意がすげえ。恐怖というよりビツクリ混乱さ。

本物の刀なんて初めてみた。

「貴様、何者だ? 大人しくステータスを見せろ。」

???

俺の頭にさらにクエスチョンマーク!!

ス……ステータス!?

ステータスって、なんだ?

資格とかか?

免許証ならあるが、それでいいのだろうか?

「えー、これでいいでしょうか……。」

俺は免許証を出そうと、ポケットから財布を出そうとした。

だが、その女は俺がポケットに手を掛けた瞬間、喉の手に刃を突き付けやがった。

恐ええ。

「貴様、何をしている。」

次怪しい動きをしたら、この刃の先が赤く染まるぞ。」

「は、はい。すみません。」

女の冷酷な声に、俺はつい謝っちまった。

ただ、財布を出さないとそのえーと、ステータスを出せないんだよな。

「何をしている、早くステータスを出せ。」

「は、はい。」

俺は、女の顔色を伺いながら再びポケットに手を掛けようとした。

が、俺は底知れぬ恐怖を感じ、咄嗟にやめた。

これをきっかけで、刃を突き付けられたんだ。

一応許可もらった方が良さそうだ。

「あの一。その、ステータス(?)出したいので、ポケットから財布だとしてもいいでしょうか?」

「財布?」

なぜ、そのような物を出す必要がある。

私は金なんかに興味はない。

貴様が何者かどうか知りたいだけだ。」

「いえ一。ですから、あの一。」

俺はどうしたらいいか、たじろいでしまう。

もしかしたら、ステータスって免許証のことじゃないのかも知れない。

間違えたら命はない。

とりあえず、擦り合わせをしておこう。

「すみません。一つ確認しておきたいのですが…。」

「何だ?」

早くだせ。それともこんなところにいるんだ、剥奪されたか?」

「いえ、剥奪も何も……」

あの一、ステータスってなんですか?」

「なっ!?!」

俺の言葉に、女は愕然とした。

ショックのせいかわ刀を手から落としてしまっている。

「貴様、ステータス知らないのか？」

一般常識……いや、赤ん坊がぁーだー言ったりよちよちしたりみたいな、DNAみたいなもんだぞ！」

DNAって、つまり、人間みな出来るってことか!?

嘘だろ！

もしかして、地球上でステータスの事知らないの俺だけ？

「本当なのだな？ 本当に知らないんだな？」

女はもう呆れたように言っている。

少し、怪訝そうな顔もしてるが、明らかに俺のこと見下している。

「ああ、一切分からない。」

「……………」

俺の応えに女は頭抱えちまった。

そして、俺の顔をチラって見ると人差し指をグルツと回し、そこを突いた。

そしたら、女の前にモニターのようなものが浮かび上がり、何かよくわからない文字がズラツと並んでいた。

「こうするんだ。」

「は……はあ。」

俺は訳がわからなくてパニック。

多分、これは夢だろうな。

今まで夢と分かった夢の中で頬をつねったことないから分からないかったが、夢の中でもつねると痛いみたいだな。

あはは。

「早くしろ、斬り殺されたいか！」

そんなこと考えていたら、女は刀を拾い上げ、再び刀を構えやがった。

短気な女だ。

嫌いじゃない。

「えっと、こうですか？」

俺は見よう見まねで、指をくるツとさせた。

「うおおー」

そうすると、さつきはみえなかったが、そのくるツとしたところに謎の青い光が現れた。

「どうなってんだーこれ!？」

俺は興奮して、女の方をみたが、女は冷たい目で俺を見ていた。すみません。取り乱しました。

俺は光を指で突いた。

そしたら光はスクリーン状に広がり、どんどん文字が打ち込まれていった。

「書き込みが始まった。

ステータスを知らなかったってのは本当だったんだな。

カドワキタケルか。

変わった名前だな。なんていうか発音がカクカクしてる。」

女はなぜか感心したように言った。

「これが、ステータスだ。

今行われているのは書き込み。

貴様の「能力」を決めることだな。」

「能力?」

俺はまた聞き慣れない単語に首を傾げる。

女は溜息をつき、また呆れたような目で俺をみやがった。

仕方ねえだろ、分かんねえもんは分かんねえんだからよお。

「能力ってのは、いわば才能みたいなもんだな。

本来は赤ん坊のときに書き込みをやるもんだが、そうか、貴様は孤児だったんだな。」

「いや、普通に親から愛情貰いましたけど。」

女の言っていることがまったく理解できず、話が噛み合わない。

女はまた俺のことを軽蔑した目で見て来やがった。

ピーーン!!

「ほら、書き込みが終わったぞ。」

奇天烈な高音がすると思ったら、女はスクリーンを指差した。

スクリーンには数字の羅列でいっぱいだ。

俺はこういうのが少し苦手だから目を背けちゃった。
別にいいだろ。

女が見せろって言ったんだから見せたまでだし。
「なるほど」。

「これが貴様の能力か……」。

女はその羅列をジロジロと見送っている。
なんか嫌だな。

自分自身では関心がない、別によくも悪くもない微妙な点数のテストを見られているような感覚だ。

女はスクリーンを最後まで見終わると、刀を納刀して、俺の方を向いた。

大丈夫だったのか？

「貴様には謎が多い」。

出身地や好きな食べ物など聞いたことのないものばかりだ。

それにこれ。」

女は訝しげな顔して右上の大きく取られたスペースを指差す。

「貴様の能力、ハテナと出ている」。

これが一番謎だ。

仮に能力がないならばつきり“無し”と出る。

だが貴様の能力は“ハテナ”。

そんなの聞いたことない」。

女は怪しそうな目で俺の方を見る。

そんな目されても俺自身よくわからないからどうすることもできねえよ。

「書き込みが遅かったから、成熟された能力が型に当てはまらなかった可能性もある」。

もしくは前例のない新しい能力か？」

女は一人でぶつぶつ言い始めた。

考え事するとき声に出ちやうタイプなのか？

「答えろ！」

貴様はどこから来た？」

女は凄い形相で聞く。

疑問と怒りが混ざってる。

あまり疑問を残したくないタイプなのか？

にしても困った。

どこからと言われても、ここがどこなのか？

言葉が通じるから日本であることは確か………なはず。

それとも移住者か。

だとしたらホントにここは日本か？

県内か？

前提がないからな。

下手に答えると斬られそうだし。

怒られそうだが、まず前提を聞いてみるか。

「あの一。すみません。」

ここってどこですか？」

そう聞くと女はピクリと皺を寄せた。

やっぱり怒らせちゃったか。

「質問に質問で返すのは礼儀違反だが、貴様は何も知らないようだし教えてやる。」

「ここは『ギルマドン』。」

「退屈で平和な村さ。」

「はあ………ありがとうございます。」

初めて聞く名前に俺は素っ頓狂な返事しかできなかった。

ギルマドン………てどこの国だ？

ヨーロッパとか欧米とかか？

とりあえず、外国っぼいな。

「俺は二ホンから来ました。」

「二ホン？」

ああ、ステータスに載っていたな。

だが、聞いたことがない。

まあ、貴様も所詮は田舎者か。」

田舎町………。

いや、日本って結構世界でも有名だと思っけどなあ。
ジャパニーズマンガとか。

それでもまあ、仕方ないか。

辺境の地なら、他の国とか知らないってのもなきにしもあらずって
感じかもな。

「グヒャアアアア!!」

わあ！

なんだ!?

いま、向こうの方から声(?)がしたぞ!

あまりに甲高くて俺も女も思わず耳を塞いじまった。

「くっ……来たな!」

ドウエスバツファ!!」

女はそう言っつて、刀を出して身構える。

てか、ドウエスバツファってなんだ?

「下がってろ!」

なんの能力を持つてるかは知らんが、無知な貴様では危ない!!」

「は、はい。」

女があまりの逼迫した声で言うから、俺はただ言葉に従うしかな
かった。

口は悪いが、俺のこと心配してくれるのか。

優しい奴だ。

「グヒャアアツ!!」

うげ!

そんなこと考えてると、凄いスピードで怪物がこっちに向かって
走ってきた!

なんだ、アイツ!?

カエルみたいな体してるが、顔は殆ど口で、目とか鼻とか、そうい
うの全然見えないぞ!!

体長も4, 5mくらいあるし、あれが、ドウエスバツファか!?

「グヒャアア!!」

とか考えてたら、ドウエスバツファは、女に飛びかかった。

危ない、食われるぞ！

「はあ!!」

そう思ってたなら、女はドウエスバッファにジャンプして刀を一振りした！

すると、ドウエスバッファの片方の前足が切断された。

うげ、やっぱあの刀、本物だったのか。

足を一本無くしたドウエスバッファはバランスを崩して、地面に激突。

瞬間、切断面から血が大量に噴き出した。

俺はこういうの大丈夫だが、苦手なやつは卒倒するだろうな。

「グヒィイ。」

ドウエスバッファは情けない声を出して、元の方へ戻っていく。

少し可哀想だが、助かっただけいいか。

もう来るなよな。

俺はドウエスバッファを見届けたあと、礼を言おうと、女の方を向いた。

だが、女は着地した後、ずっと蹲ったままだった。

「おいー！

大丈夫か？」

俺は慌てて声をかける。

肩に手を当てて、顔を横から覗いた。

意外と可愛い顔してるな。

と呑気なことを考えてたら。

「う……………おえ……………」

げふ。がは……………」

うお！

この女、吐いた！

吐きやがった!!

「おいー！大丈夫か!？」

俺は慌てて女の背中をゆする。

それ以上の知識はないから、それくらいしかすることができないの

が苦しかった。

よく見ると女の顔に血色がなく、唇も真っ白だ。

でも、体にはドウエスバッファにやられた傷は見当たらない。出血多量でこうなつた訳ではなさそうだが、まさか、この女。

「はあ………はあ………気にするな。」

どけ、私のそばに立つな。」

女はしばらくするとそう言つて立ち上がった。

「おい、無理するな。」

まだ顔が真っ青じゃないか。」

「いいから、どけつていつてんだ。」

女は虚勢ともとれる威勢を張つて、俺に命令する。

命令されるのは癩だが、病人に言われちやいう通りにするしかないな。

女は俺が離れると、血飛沫がついた刀身を恐る恐る見たと思つたらすぐに顔をそらした。

(やっぱりか。)

女は2，3回突つ掛かりながら、ノールックで納刀しフラフラしながら俺から見て左の方へ歩き出した。

平気なのか？

なわけ無いだろうな。

そう思つてると女は俺の方へ顔を向けた。

「ついでに……。」

どうせ………この辺の地形も無知なんだから……。」

「あ、ああ。」

俺はから返事をしてついていくしかなかった。

体を支えようとはしたが、女は拒絶するに違いないし、それが癩に障り、斬られたてでもしたら嫌だしな。

少し歩くと住宅地に来た。

と言つても、家は木造で4，5件しか建つてなかつたけどな。みんなねずみ返しのようなのがついている。

もともと倉庫だったのか？

「ほら、入れ。」

女は一番手前の家の階段を上がり、扉を開けて中に入り、俺に入るように促した。

「お邪魔します。」

俺は家の中に入る。

習慣的に靴を脱ごうとしたが、玄關的なものはなかったし、女も土足だと気付きやめた。

にしてもこの女の靴、スニーカーみたいだが、ずいぶんと汚れてるな。

家の中は小さな部屋一つにベッドと棚が一つあるだけだった。

キツチンとかトイレとかそういうのではない。

どう生活してるんだ？

俺はそう思いながらとりあえず部屋の真ん中に立つ。

女は棚からズラツと並ぶ液体の入った瓶を一つ取り出し、それを飲んだ。

すると、女の顔色がどんどん良くなる。

すげえ。

「なんだ？」

その、えつと、なんだっけ？

ニホン？にはこういうのなのかい？」

女は呆れたような感じで聞いてきた。

俺が凄く興味深そうな顔していたからかもしれないな。

「それって、薬ですよ？」

一応ニホンにはありますが、即効性があるのは初めてですよ？」

「ふーん。遅れてるんだな。」

吐き気止めくらい、簡単に醸造できそうなのに。」

女の何気ない一言に俺はイラツときたが、なぜか俺は安心していた。

多分女の具合が良くなってホツとしたんだろう。

「それで、貴様はなぜあそこにいたんだ？」

平原にただ一人。武器も何も持たずに。
赤ん坊ならまだわかるが、貴様はどう見ても大人の男だ。
まだ青臭いがな。」

「それが、俺にも分からないんです。
気付いたらあそこに立っただけ。」

「は？」

貴様、ふざけるのはいい加減にしろよ。

あんな姿を見て、私をナメてんだろ？」

うわあ、すげえ怒ってる。

地雷踏んだか？

でも、ホントにこれだけだもんな。

それに、身の回りだとか生活の常識は覚えているが、自分の出生に
関してはまったく覚えてない。

なんでだ？

「おい、答えろよ。」

この刀が、もつと赤くなる前に。」

うわ、怖え。

だが、女はそう言ってるが、刀は抜いてないし、抜こうとしてもして
ない。

けどまあ、とりあえずホントの事を言うしかない。

「本当に分からないんです。」

それに自分の事も殆ど忘れてて。

いつの間にか見知らぬ土地にポンツと。」

俺はそう言うが、女の疑いの目はそのまま。

いや、どんどんその顔が険しくなっている。

逆効果だったか？

でも、下手にウソについても状況は変わらなさそうだし。

「貴様！」

何回私をおちよくればいいと思う!!」

女はついにプツンして、鞘に納まったままの刀を振り上げ、俺に
がなりたててきた。

「ちよ、ちよつと待つてください！」

本当に分からないんです！」

本当に分からないんだ！」

嘘ではない！」

だが、もうだめかもしれない。

絶対、踏んではいけない地雷を踏んだ

ああ、これが夢であつてくれ。

女は勢いよく刀を振り下ろし、俺の少し手前で止めた。

やっぱこの女、腕前は確かなんだな。

素人だからよくわからないけど。

「貴様も。もう分かつてんだろ。」

？

急に女が聞いてきた。

俺は答えようとしたが、女は答えを待つことなく続ける。

「私は、血を見るのが苦手なんだ。

小さい頃のトラウマだな。

見ると吐き気がする。

文字で見えるのも、実際に見るのもだめだ。

紙で指を切るとき程度でもな。

笑つちまうだろ。

剣士のくせにつて。」

女は俺に自嘲的に言う。

俺はなんて返していいかわからない。

な。
こういうのつて下手に同情するのは逆効果になることがあるから

「私は、貴様を斬ることはしない。

だから貴様に私の要件をのんでもらう。」

「要件？」

なんのことだろう？

交渉ってわけか？

「貴様の言葉。」

突拍子もなく、嘘をついているにしか思えない。

だが、貴様は頑なにその嘘を言い続ける。

だから、もしかしたら本当なのかもしれない。

けれど、私にはそれを判断することができない。

だから、それを判断できる人に会いに行く。」

女は刀を腰に納めた。

とりあえず、一時助かったってことか？

「いくら無知な貴様でも、知ってるだろう。

「ビビンニ」にな。」

え？

女は改まった感じで言うが、俺はクエスチョンマーク。

全くわからない。

「貴様。ビビンニも知らないのか。」

女はまた呆れた感じで聞いてきた。

無知ですみません。

「うーん。

なら、まだ隠し通せるというわけか。

なら都合がいい。」

また、女は一人でぶつぶつ言い出してる。

隠し通せる？

都合がいい？

どういうことだ？

「貴様。

ほら、家から出ろ。

すぐビビンニに行くぞ。」

え、もう行くのか？

顔色はよくなったが、まだ家に入ってから数分しかしてねえぞ。

でもまあ、女はすぐ行きたがってるし、また無知って蔑まれるのも

いやだからな。

素直に従うか。

俺は家から出て、階段を降りた。

少し経って、女はズタ袋のようなものを下げて出てきた。

中からガラスがぶつかり合う音がするが、何が入っているんだろう？

それに袋はツギハギだらけだ。

ずいぶんと長く使ってるんだな。

「ほら、行くぞ。」

そんなこと考えてたら、女は顎でしゃくり、村の中心部まで歩き始める。

俺はとりあえず、付いていくことしかできなかった。

村の中心部はお店がたくさん並んだ。

と言っても、建物が構えられてるわけではなくフリーマーケットのように敷物引いて、そこに食べ物やら洋服やらが並べられてる感じだ。

「ミーレさん。」

お願いします！」

女は、4、50代くらいのおばさんのところで立ち止まり、腰に納めてた刀を渡した。

てか、今の声と態度なんだ。

すげえ猫かぶってるっていうか、俺へのつつけんどんな態度はどこへ？

「あら、ホースイちゃん。

今日は早かったのね。」

「はいー。」

ちよつと先にありますので、回収はお任せします。」

「はいよ。」

ホント、わるいねホースイちゃん。

血がだめなのに、あんなこと請け負わせちゃって。」

「いえいえ。大丈夫ですよ。」

ホント、すげえ猫なで声だ。

それともあれが素か？

なんか楽しそうだし。
ちよつと可愛いかも。

……にしても、さつきあのおばさん、
“ホースイ”って言ったな。

あの女の名前か？

ホースイなんて名前、なかなか聞かないな。

それにあのおばさんの近くには刀が沢山おいてあるから、
刀売りみたいだし。

本当にここはどここの国なんだ？

「はいこれ、ちゃんと仕上がってるよ。」

「ありがとう！ミールさん！」

「いいのいいの。」

じゃ、今日もよろしくね。」

「はーい！」

女はおばさんから、別の刀を受け取った。

さつき渡したのとそっくりだ。

もしかして、刀の返り血もだめだから一回一回変えてるのか!?

本当になんであいつは剣士やってんだ!?

「ほら、なにボケつとしてんだ。

行くぞ。」

俺が驚いてると、女は肩をぶつけてまたつつけんどんな態度で話し掛けた。

裏表怖ええ。

村の門を通り、草原に出た。

数分間歩いたが、あるのは草、花、木、岩くらいで、蝶々一羽も飛んでない。

こう同じ風景が続くと退屈だな。

女は全然口効かないし。

「おい。」

って思ってたなら、女が話し掛けてきた。

「貴様。」

さっきの私の姿のことは忘れる。」

「え?」

どういうことだ?

もしかして、恥ずかしいのか?

「私は好きでぶりっ子してるわけじゃない。

それにどっちかというところちが素だ。

と言つても、ロクなコミュニケーション取ってないから、素がどう

いうのか忘れちまったけどな。」

この女、すげえ饒舌をふるってる気がする。

顔も合わせないし、やっぱ恥ずかしいのか?

まあ、どちらにしてもそういうことにはしておくか。

煽ったら斬られそうだし。

「ゲビャアアア!!!」

わあ、なんだ!?

すげえ重低音のような大きい音が、村の方から聞こえてきたぞ。

「くっ……もう来ちまったか!」

来た……??

えっ、一体何が来たの?

「貴様!」

下がってる!」

「え、あ、はい!」

女は刀を抜き、構える。

俺は後ろへ下がり、見守るだけだ。

てことは、また怪物?

「ゲビャアア!!!」

「うわあ!!」

怪物が姿を現した途端、俺は腰を抜かしちまった。

なんせ、その怪物はさっきのドウエスバツファと瓜二つなのに、大

きさが10mくらいある。

しかもすげえ怒ってるみたいだし。

もしかしてきつきのやつの親!?
倒せるのか!?

「はあー!」

女はなんの躊躇もなくドウエスバッファに向かい走る。

ドウエスバッファもデカイ口を開け、ヨダレを垂らしながら女に向かう。

うわあ、アニメでよく見るような光景だが、間近で見ると結構迫力あるな。

「はあ!!」

女の方が先に剣を振り下ろした。

が、早すぎた。

剣はドウエスバッファの歯に当たってしまい、傷一つ負ってない。

嘘だろ。

俺たち、ここで死ぬのか?

ドウエスバッファは、歯を噛み合わせ剣を噛み砕く。

もうおしまいだ。

と思った矢先、女は剣を引き、そのままドウエスバッファの胴体の方へ走り、折れて短剣のサイズになった剣を一振りし、前足を切り裂いた。

「貴様! やったか!」

足は切断されてるか?」

女はドウエスバッファが視界に入らないように手で隠して、俺に聞いた。

えーと、だいぶ弱ってるからだいじょー……………

「ゲビャアアア!!」

ぶじやない!!

「まだです!」

完全に切り落とせていません!!」

あんなバカでかい足を、小さくなった剣で切断するのは無理だったのか。

だがどうする。

切断はできてないが、切り口から血が出てるぞ。

「ちっ！踏み込みが浅かったか！」

コイツ！もう一発くらいたいか!!」

女はやりきれてないと分かり、ドウエスバッファに体を向けた。

その瞬間、

「う……………!!」

女の顔が一瞬で青褪めた。

そして、折れた剣をノールックで投げたが、距離が届かずに虚しく地面に落っこちてしまう。

ダメ元でやった行動なのか。

だとしたら、もう終わり!?

俺たち、こんどこそ本当に死ぬ!?

「ううええ……………」

わあ、また女が吐いた!?

完全にだめなやつじゃねえかこれ!

「ゲビャアアアア!!」

ドウエスバッファは怒りがピークに達している感じだ。

今すぐにも飛びかかりそうだが、もしかして嘔吐物にビビってる?

少し躊躇してる感じが。

こ……………こうなったら。

俺の、俺の謎めいた能力でなんとかするしかないのか。

俺はそう思ったら、体が自然と女を庇うような位置まで立っていた。

なにができるか分からないが、とりあえず、この女を守らなくちゃいけないって本能で感じた。

「ゲビャアアアア!!」

ドウエスバッファは俺に飛び掛かってきた。

興奮して、目に付いたものは見境なくって感じだな。

さあ出る、俺の能力!

なんだろうな。

カッコいいのがいいな。

例えば、炎を操り、あいつを丸焦げにするとかな!!

「ゲビイイイイ!!」

「え?」

俺は思わず素っ頓狂な声を出した。

だって、想像していたものと全く同じようになったからだ。

具体的に言えば、両手を差し出すとその間から炎が飛び出し、ド
ウエスバツファを包み込んだ。

感動とか安心とかより驚きの方が大きかった。

「ゲビイイイイ……………」

ドウエスバツファの断末魔とともにやつのは灰となり、消えて
いった。

ああ、小さい頃、虫も殺せなかった俺が、あんな大きいやつを殺し
たのか。

なんか複雑だ。

「貴様。なんだ?いまの。」

女の声をして後ろを振り向くと、女はダガーを持ちながら、驚愕し
た表情で俺を見詰めていた。

足元には薬の空き瓶が転がってる。

「答えろ!」

なんだって聞いているんだ!」

女はダガーを首の近くへ当てながら俺に聞く。

血見るの嫌なら、その癖やめない?

「わかりません。」

こうできたらいいなって思ったら、炎が出て、あいつを丸焼きに。」
その答えを聞いて、女はダガーを納めた。

「そうか。」

貴様の……能力か。」

「能力……………」

これが、俺の能力か!

炎!

単純だが、カッコいいなー!!

俺は自分の掌を見詰めた。

ここから炎が出せると思うと、いつもより逞しく、そして温かく見えた。

「そうだよな。」

みな、能力は持つてるんだよな。」

俺が密かに喜んでると、女は悲しそうな表情で言った。

俺はその言葉の意味がよく分かっていなかった。

ビバー！ビビンニ

うおお、でっけえー！

ギルマドンの村から出て、一時間くらい経ったかな。

小高い丘を登ると、ビルやら建造物やらが存在感を示すかのように建っていた。

なんかよくわかんないけど、大きい建物って興奮するよな。

「ふー。あれが、誰も知ってる。大都市ビビンニだ。」

女は周知なことを強調して言ってきた。

なんか腹立つが、もう愛敬だな。

「貴様、ビビンニに入る前に、少し口裏を合わせたいことがある。」

「口裏を？」

なんのことだ？

そういえば、都合がいいとか言ってたな。

まあ、よくわからない土地で放り出されても困るし、何言われても素直に従うか。

「ああ。」

あの街はな、ギルマドンの民に対してかなりの嫌悪を示しているな。

基本的に入入りさえも禁止されているんだ。」

へえ、結構厳しい街なんだな。

どこ行っても田舎もんは干されるものなのかな。

「だが、一つ例外があり、ギルマドンでも出入りの許可が下りることもなる。」

それは、他の地域の民と「グループ」を結んでいることだ。」

はあ、なるほど。

わからないって言うことがわかった。

……グループってなんだ？

「……その顔、貴様、グループも知らないのか？」

俺はコクリと頷く。

無知ですみません。

だが、女もそろそろ慣れたのか、呆れた感じが少し減ってなんか
淡々と説明しだした。

「グループってのは、ああ、なんて言うんだ。口で説明すんのは難しい
な。」

とりあえず、そう！証だ！

信頼した人同士の証みたいなものだ。」

へー、証ね。

信頼とかそういうのを目に見える形にするのか。

なんか、変な感じだな。

それで、口裏合わせて何をするんだ？

今、そのグループを結ぶのか？

「今ので分かったか？」

「ええ、ニュアンス程度に。」

「そうか。じゃあ本題に入るぞ。」

グループってのは簡単に結べるもんじゃなくて、役所で手続きが必
要なんだ。

だが、その役所はこのビーウエス域にはビビンニしかない。

それに、グループを結ぶときも結構シビアでな、家族だとか恋人と
か、つながりが深くなければならぬんだ。

だからだな……その。」

女は言葉に詰まり、モジモジしだした。

なんなんだよ。

いつも通りズバツと言ってくれ。

じれったい。

「グループ結ぶまで、私の彼氏役を……頼んでくれないか？」

「なっ……！」

おい！

いきなり何言ってるんだ!?

いや、いきなりじゃないが、初対面でロクに自己紹介をしてないや
つに彼氏役って！

「おい！なに動揺してやがるんだ！

「役だぞ！フリだぞ！」

私と貴様なんかじゃ、釣り合うわけねえだろ！バカ!!」

うわあ、そういう女もすげえ動揺してんじゃん。

めつちや赤面してるし、かわいい。

そうだよな。

こんなかわいい女と、無知な微妙男と釣り合うわけないよな。

「んっんんー！いいか、フリだからな！」

でもちゃんとやるんだぞ。

貴様がハマしたらなにか被るのは私なんだからな！」

はいはい。

分かったって。

すげえ必死だな。

そんなにビビン二の人たちは田舎もんに厳しいのか？

「ほら、今のうちに練習しておくぞ。」

とりあえず対応は適当に私に合わせればいいが、呼び方だ。

ほら、恋人っぽく呼んでみる。」

ええ……！

いきなりそう言われても、名前を覚えてもらってないんだが。

村のときに、おばさんから言われてた気がするが、なんだっけかな。

「ほら、早く言え！」

それともなんだ！照れてんのか！」

「いえ、そうではなく……。」

あの一、お名前聞かせてもらってもよろしいでしょうか？」

俺がそう聞くと女はまた呆れたような目付きで見てる。

いや、これは女の責任だろ！」

「……………そういや、まだ名前言ってなかったな。」

私はモニム。ホースイ・モニムだ。」

へえー！

モニムちゃんか！

かわいい名前だ。

「はい。わかりました。」

モニム……ちゃん。」

そう言った途端、女はものすごい形相で喉元にダガーを突き付けてきた。

え、ちよつ、言われた通り恋人っぽく言ったじゃん！

「貴様……ふざけてるのか!!」

モニムはファミリーネームだ！

ファーストネームはホースイ！

どれだけ無知なんだ!! 貴様は！」

「は、はい。すみません。」

ホーシー………さん」

謝つたらとりあえずダガーは納めてくれた。

ホントに刃物で脅すのやめてほしい。

なんだ、モニムはファミリーネームだったのか。

「まあ、そんなくらいでいいだろう。」

あとホーシーじゃなくてホースイだからな。

それにさんじゃなくてちゃんがいい。

私の方が年下なんだからな。」

「は……はい。わかりました。」

ホースイ………ちゃん。」

なんか、色々めんどくさいな。

細かい発音くらいいいだろ。

てか、年上って分かった上でこの高圧的態度かよ。

俺、もしかして結構なめられてる？

そんなこんなで、呼び合う練習しながら俺達は大都市ビビンニに着いた。

すげえ。

周りは壁に囲まれてるし、その外周には堀のような池がある。

まるでお城だ。

池には大きな橋が架かっていてそこから入れるようだな。

よし、行くか………と思つて橋に足をかけたら、ホースイは俺の服を引つ張つた。

「いいか。貴様は無知だからな。

私に合わせるだけでいい。

絶対に下手な真似はすんじゃないぞ。」

「は、はい。」

とりあえず返事はしたが、これでもう何回目だ？

どんだけ心配性なんだよ？

あと、練習したんだから貴様つていうのやめろ。

気が狂う。

「じゃあ、行くぞ。」

ホースイは俺を後ろに引き、スタスタと歩いていく。

前を歩かせたくないつてか。

プライド高いな。

まあでも、道順分かんねえし、こっちのほうが好都合か。

俺達は橋を渡り、門をくぐり、街の中へ入つた。

意外とすんなりといけたな。

門番とかはいないのか。

にしてもすげえ！

どこを見ても人！人！人！

まるで東京の某所だな。

「さて、おい。貴様。」

俺が関心してるのにホースイが水をさしてきた。

いいだろ別に、都会つてなんかワクワクするじゃんか。

「テキトーに人捕まえて、役所までへの道を聞いてこい。」

「え？」

聞いてこいつて………おい！

ホースイも知らねえのかよ！

「ホースイちゃんが知ってるんじゃないんですか？」

つい聞いちまったが、ホースイは俺のこと睨んできた。

「知ってるわけねえだろ。私もここに入るのは初めてなんだからよ。」

「は、はあ。」

そうなのかよ。

たしかに言われてみれば、ギルマドンの住人は出入り禁止だったもんな。

「おい、そこー！」

そこの汚い袋を下げた娘！」

？

なんだ？

強面のおっさんがこっちに来るぞ。

汚い袋を下げた娘って、ホースイのことか？

ってことはもうかよ！

「もう見つかったか。」

仕方ねえ、あいつに聞くぞ。」

「ええ、じゃああの人が」

「ほら、つべこべ言わずやるぞ。」

「……はい。」

やっぱりか。

うまくできるか心配だ。

「君、ギルマドンの民だろ。」

ほら、ここは君のようなものが来るとこじゃないよ。

ほら、帰った帰った。」

うわあ、すげえいいよう。

人権とかあるのか。

「もう、ほら〜！」

カドくん！言ったでしよ！」

やべえ、いらんこと考えてたら不意打ちくらった。

計画通りだが、ホースイは俺の腕を両手で掴んで刀屋のおばさんのときのようにめちやくちや猫被りで俺に言う。

「グループ結んでなきやいけないのに、カドくんがそのために行くなら平気平気って言うから！」

うう、なんだこれ。

次、俺だよな。

えっとなんて言うんだっけ。

俺は最初、興奮だとか悩殺だとかそういうのかと思っただが、これは違う。

性格や印象が違い過ぎて脳が混乱している！

「へえ、そうなのか。」

えっと、君は……そう、カドワキタケル。」

え、なんで俺の名前を！

それにホースイのことをギルマドンの民って見破ってたし、なんでだ？

「貴様。」

痛っ！

おお、この女！

抓ってきた！

しかも小声かつ低い声で言われるのめっちゃ怖い！

は、そうだ！

セリフ言わなくちやいけないんだ！

「ぐ……ぐめんなあ。ホースイ……！」

あ、やべ。

俺、めっちゃ緊張してる。

ホースイ！そんな目で見るな！

俺が一番わかってる！

「もういい。私が交渉する。」

貴様はもう喋るな。」

は、はい。

すみません。

「あの。私たちグループを結びに来たんです。

それで役所に行きたいんですが、道がわからないんです。

教えてもらえませんか？

ハンサムな保安官さん！」

わあ、最初はカワイイって思ったけど、素を知つてるとなんか気持ち悪いな。

それに、妙な色気を出そうとしてるし。

まだ酒も飲めねえような年だろうが。

「あ、ああ。」

そうだったのか。こ、これは失礼……。」

あ、意外と聞いてるっぽい。

「道案内なら、ハンサムな……この俺、ガディヌ・ディスタがする。

縁は切ってるだろうが、一応ギルマドンの民だからな。

野放しにするわけにはいかない。」

うわあ、この保安官、結構調子に乗ってる。

ってん？

縁は切ってる？

どういうことだ？

「は……い！ありがとうございます……す……！」

ホースイは無邪気に返事して保安官に付いていく。

女って怖えな。

「貴様、なに突っ立ってる。」

呆気に取られている俺に、女は冷徹な顔で言った。

女って怖えな。

保安官に連れられ、俺たちは役所に着いた。

いや近え！

入口から歩いて1分も経ってねぞ！

しかも道、真っ直ぐだったし。

「ありがとうございます……！」

「いやいや、保安官として当然のことをしたまで。」

このハンサムガイ……ガディヌ・ディスタ、いつでもビーウエス民の味方です。」

調子いいこと言ってやがる。

ってかビーウエスってなんだ？

さつきホースイが言ってたような気がしたが。

まあ、また成り行きで教えてくれるか。

「さあ、いくぞ。」

「はい。」

保安官がいなくなったらこれだよ。

言われるがまま、役所に入った。

うわあ、大都市なだけあって綺麗だな。

「ほら、貴様からいけ。」

「え?」

いけってどこに?

役所に入ってからは何もリハーサルしてないんだけど。

「鈍いな。あそこだよ。」

ほら、一番手前のグループ課!

そこへいきやあいんだよ!」

「は、はい。」

そんな怒らなくても……

って思ったが、道中結構セクハラ発言されてたからなー。

気が立ってても仕方ないか。

俺は言われる通り、グループ課のカウンターに向かった。

『なにか、御用でしょうか?』

うわあ、機械だ!

進んでるな!

よし、じゃあサクッとグループ登録を……ってなんだ?この文字。

「なにグズグズしてんだよ。」

簡単だからさつさとやれ!」

そう言われてもなあ。

「あの、少し聞いてもいいですか?」

「ああん! 貴様機械音痴か!」

操作がわからないなら、右下のヘルプ押せばできるからそれでやれ

！」

「いえ、そうじゃなくて。

これら全部、なんて読むんです？」

「はっ…!？」

ホースイは今までで一番、驚愕した表情で俺を見る。

「貴様。今までどう生きてきたんだ？」

「すみません。」

俺ももうどういいう半生送ってきたかわからない。

「ほんとうにコイツはなんなんだ？」

ステータスもわからない。書き込みも今日。ビビンニを知らなければ文字も読めない。

おまけに出身地や好きな食い物もよくわからんものだし。

はあ。使えるところは無口で逆らわないってとこだけか。

だが、ここまで来た以上こいつとグループ結ばなきゃタコ殴りだからな。」

おい、全部聞こえてるぞ！

いやまあ確かに、DNAに刻まれてるような事ができなかったり、識字能力ゼロだったり色々不安になるだろうけどさあ！

「貴様、ステータスの出し方は覚えているよな。」

「ええ、指をくるつとして……」

「わかった。じゃあそれをやれって言うまで貴様は何もせず……！空気のように……！ここに立ってる……！

いいな……！」

「は、はい。」

それからホースイは画面とにらめっこしながら、操作しだした。

なんかすげえ苛立ってるし、画面叩こうとしてるし。

ホースイも機械音痴なのかよ。

「なんだよ、このクソマシン！」

ほら、さっさとやれ！

ここにだ！画面には触るなよ！」

それから10分経ってようやく出番が来た。

おお、画面の上でなんか青白く光ってる！
どうなってるんだ!?

「殺されてえか！さっさとやれ！」

「は、はい！」

関心してたら、画面じゃなくてホースイの癩に障った。

俺は急いで光ってるところの手前で指をくるっと回し、指で突いた。

ホースイも同じように指で突く。

数秒ほどこの状態をキープしていると、画面の表示が変わった。

成功か？

「どけ、文字が見えない。」

「はい！」

「まあ、こんなもんか。」

じゃ、これから私と貴様はメンバーだ。」

成功っぽいな。

ってかメンバーってなんだ？

多分あれか、グループが同じ人のことかな。

「はい、よろしくお願いします。」

俺は握手を求め、手を差し伸べた。

だが、ホースイは叩いてそれを拒む。

「誰が貴様なんかと。」

それに便宜上、貴様をリーダーにしているが、立場は変わんねえからな。」

「はい。……わかりました。」

なんか、今になってすげえ利用されてる感が出てきた。

もつといい人に見つかりたかったな。

俺とホースイは役所から出た。

ホースイ、まだ苛立ってるよ。

いつかホントに刺されそう。

もう少しこの国のこと詳しくならなきゃな。

……でも、字が読めないんじゃないか。

ホースイは教えてくれるだろうが、一々怒られなくちゃいけないのもな。

「貴様、じゃあ行くぞ。」

「え？」

行くつて……どこへ？

「ッえっ、じゃねえよ。」

ここに来た理由、なんだか覚えているのか？」

理由……………」

あー！そうだ！

俺の言うことが嘘か本当か確かめに来たんだ！

そうじゃん！

ホースイはまだ俺がからかっているって思っているからあんなに苛ついているのかも！

本当つて分かれば教えてくれるかも！

「はあ……。」

貴様といると疲れる。」

ホースイはそう吐き捨て、入口方面へ一人で進んでいく。

なんか、言い方素っぽかったかも。

割と傷付く。

てか、道わかるのか？

「おい…そのジャラジャラ音鳴らしている女!!」

ん？

なんだ？

入口方面から逆の方からドスの効いた声が。

そして、なんだ？声から逃げるかのように人が押し寄せってくるぞ！

ジャラジャラつておい、まさか…！

「何シカトしてんだよ！

テメエだ！ツギハギだらけの薄汚れた袋鳴らした女だよ!!こつち

向け！コラア!!」

うわあ、間違いない、ホースイだ…！

もう、申請したじやないか。

「なんだ？私に用か？」

ちよつ、おい、反応したらまずいつて！

「ああ、そうだ。」

2回で返事したか……俺も結構人の特徴を捉える力を付けたもんだな。」

何言ってるんだ……………。

つてうわあ、あの男がホースイの後ろに立って分かったがでけえ！

身長何センチあるんだ!?

2 m近くあるぞ。

あごひげ蓄えて、顔も怖え！

俺だったらチビリそうだ。

「ナンパなら別のヤツにしな。」

今、取り込んでるんでな。」

おい、何挑発するようなこと言ってるんだ!!

お前との身長差は50cmくらいあるんだぞ！

穩便に済ませろ！

「ナンパ…………？」

ガハハハハハ!!

面白い冗談だ！俺がナンパするわけ無いだろ!?

お前みたいなの『田舎物』を」

「……………」

明らかな挑発だ！

ホースイはそれに乗ってしまった。

胸あたりに納めたダガーを抜き、俺を脅すときのように切っ先を男に向けた。

だが、男はビビることはせず、その刃に対し殴ろうとした。

刃は男の拳を串刺しに……………つと思つた時、

「ぐおうら!!」

「ぐわッ！」

男の拳はホースイの顔面を強打し、殴り倒した。

吹っ飛ばされたホースイはよくわからないような表情をしている。あの女、刃が刺さるのを見て、目を瞑っただろう！でも、その光景を見ていた俺にもよく分からなかった。遠くから見ていたからなのか、目の錯覚か分からない。確かに男の拳に刃は刺さっていた。だが、今見るとヤツに傷はない。どうなってるんだ？

「俺はなあ。」

さつきあそこでギャンブルして来たのさ！
だが、負けちまってよお。

それでムシヤクシヤしてんだ!!

そこにお前がどうぞ私を殴ってくださいと言わんばかりに立っていたんだ。

ついてるよなあ。

その運をギャンブルの方に渡せゴラア!!」

さつきの現象もだけど、こいつもなんなんだよ!

ホースイは……よかった。

出血はしてない。

立ち上がってるし、またダガーを向けた。

まだ戦えそうだ……っておい!

戦うな!逃げろ!

てか、野次馬も集まってきたし……。

保安官……!さつきと違う人だが止めるよ!

喧嘩起きてんだぞ!保安しろ!

「はあっ!!」

うわ!ホースイのやつ、ダガー持って飛びかかりやがった!

「負けん気が強いねえ!

これだからやめられねえな!!」

男もまた拳を振り上げて正面から殴ろうとしている!

今度こそしっかり見るんだ。

それでまた不可解なことが起きたら引っ張ってでも逃げる!

「はあ!!」

ホースイと男の距離が5 mくらいに縮まったとき、ホースイは折れた刀を取り出し、男の腹目掛けて投げた!

奇襲か!

なかなかやるな!

男はホースイを殴る動作に移っているから防御もできない!

そして男は怯むはずだ!

そのスキに逃げるぞ!

さあ、どうだ!?

男の腹に刀が刺さって………つて、え!?

すり抜けた!?

刀が!? やつの腹をすり抜けたぞ!!

「貴様! やったか!」

やったか………?

つてまさか、ホースイ!?

俺は青褪めた顔でホースイを見た。

見るとホースイは手で男の姿を隠し、更には目を瞑っている。

バカか! 男はもうお前の目の前なんだぞ!!

「うおら!!」

「ぐは!!」

男は無防備なホースイを力一杯殴った。

ホースイは10 mくらい吹き飛ばされる。

野次馬共は歓声を上げている。

なんだこいつら、楽しんでるのか?

「おいおい、どうした?」

さっきの威勢はよお!?

刀ぶん投げて終わりか?」

男は嫌味を言いながらホースイに歩み寄る。

逆上させてまた返り討ちにするつもりか?

どんだけ腕に自信があるんだ。

「ほら、かかってこいよ。」

それとも何だ？
恐れをなしたか？

「糞以下のギルマドン民。」
うわあ、やつぱり、ギルマドンの住人だから狙われたのか。
酷え人種差別だ。

「く……………誰が……………お前なんか……………」

「ホースイはまた立ち上がろうとしている。
強打を受けて、目のあたりに紫色の痣ができてい
る？ たしか目は手でガードしていたような？」

まあ今はどうでもいい、ホースイ、目を瞑ったまんまだ。
あの女、まだ腹に剣が刺さっていると思ってるのか。

「教えてやんねえと。
ホースイがやられてしまう。
教えるんだ。」

俺は口を開け、ホースイに教えようとした。
そうしようと頭の中では思ってた。

だが、言葉は出なかった。

「そうだ、俺はあの男と敵対するのを恐れているんだ。
イジメられている人を助けようと思うが、自分もイジメられてしま
うかもって心のどこかで思い、躊躇するように。」

俺は……………何もできなかった。
「そっぴやさつき、お前なんか言ったよな？」

俺に対してじゃねえ。このギャラリーの誰かにだ。
ギルマドン民が、ビビンニを跋扈してるのはおかしいもんなあ。
誰かメンバーがいるだろ？」

ドキ!?

やべえ、俺の事だ！

俺はつい目をそらしてしまう。

いや、確かにここで俺がそのメンバーだって言えばカツコいいが、
ホースイでも敵わない俺があんなヤツの相手になるわけがない！

「いや、いるわけねえよな！

どうせお前も逃げられたんだろ！

結婚するにしても、冒険するにしてもギルマドン民をメンバーにするのは足枷にしかならねえんだからよお!!」

「はあ!!」

ちよっ、おい！

ホースイがまた飛びかかった!!

目は瞑っているが、声から距離を計算したのか、向きはあつてる。だが無謀だ！

「うおら!!」

「ぐわああ!!」

男のカウンターパンチがまた、顔面に直撃した。

かわいい顔が台無しじゃないか。

ホースイは倒れ、鼻血が出ている。

もうだめだ。

助けてやりたいが、ヤツを倒す力が……………

力…？

そうだ！力だ!!

俺には炎の能力があつた！

ヤツは今、俺に背中を向けている。

そこに一撃くらわせるんだ！

そしたらヤツは怯む！

そのスキにホースイを抱えて逃げるんだ！

やるしかねえ！

チャンスは一度切り！

いくぞ!!

能力

チャンスは一度切りだ！

行くぞ！

俺は手に炎を宿し、男に向かい走る。

男はホースイに集中していて俺には気付かない。

その隙に背中でも脇腹でも炎の拳を放ってやる！

「死んだか？」

「いや、反撃の機会を伺っているな？」

だが、無駄だ！」

やべ、男はトドメを刺そうと倒れるホースイの腹へ殴ろうとしてやる。
がる。

こいつ！慈悲つてもんはないのか!?

仕方ねえ、バレるだろうが止めなくては！

俺は炎を男の拳目掛けて発射する。

「熱ッ！なんだア!？」

よし、怯んだ！

それにパンチに体重を乗せてたのか、バランスを崩してさっきよりも隙だらけだぞ！

行ける。

俺は再び拳に炎を宿し、男を殴った……………

はずだった。

「え？」

だが、確かに男の体に触れた筈の俺の拳は空を切ったかのように通り抜けた。

目の錯覚だとか、マジックのようなトリックでもない。

本当に通り抜けたんだ。

なんなんだ、コイツは…………幽霊なのか…………？

「おい、あんちゃん。」

ひっ…………!?

男は不気味な笑顔で俺の肩に手を回した。

怖え！

それにすげえ臭い息が当たってるし、幽霊でもねえ！
ナニモノなんだ……!?

「若いねえ。」

最高のヒーローショーを見てヒートアップしちゃうのは分かるんだ。

だがな、どつちがヒーローかってのを見誤っちゃうのはいけないなあ。

見る目ないんじゃないの？」

「お前……誰と話してやがんだ……?」

相手は私だ。関係ねえやつ巻き込んでんじゃないやねえよ……!」

おい、ホースイ！

起き上がるな！

それにまたこう挑発的な態度取って……!

力の差分かっているのか……!?

「おーほら、あんちゃん。」

ヒール役が目覚めたぜ。

俺は最近、人の細かいことを見るのにはまってんだ。

あんちゃん、あの田舎者が立ったとき、ムズムズしたろ。

ズバリ、今のお前はその炎の力で誰かをぶっ飛ばしたいって思ってるんだ！

いやあ、また一つ賢くなったぜ！」

何言ってやがるんだこいつ……!?

体は震えたが、ムズムズなんかはしていないし、その逆だ。

立ち上がったことでホースイがやられねえか心配してドキドキしたんだ。

「じゃあ、あんちゃん！

一発だけやっていいよ、特別だ。

安心しろって、あの田舎者の目は俺が潰してあるからあんちゃんの姿はわからねえよ。」

そう言って、男は俺を離して、ホースイの前に立たせる。

最悪だこの男。

仮に俺がホースイを殴れば、俺も俺もと他のギャラリーがやってきて袋叩きになる。

逆に殴らずにいたら男は俺を押ししてホースイに更に近づけるだろう。

だとすると、目の前にいるのが俺だと気付いていないホースイは俺を刺す。

そして、その直後に男はホースイを殴り、英雄になり、ホースイは豚箱だ。

だから、やるしかない。

一回目の炎はやつの拳に直撃した。

二回目はすり抜けたと思っただが、多分何かしらの目の錯覚だろう。

やつはギャングブラーだ。

イカサマやらトリックならが得意なはず。

それを利用したんだろう。

だが、それを用意させる暇もなく、この右の拳をやつの顔面に叩き付ける!!

そうできた、やつが反応する暇もなく、殴れた……のに。

「あんちゃん……。」

いけないねえ。」

やっぱり、やつの顔面を通り抜け、空気を殴ったようにまるで手応えがなかった。

「特徴を捉えられないのはいけないねえ。

捉えられなかったとしても、学習しなきや。

学ばなきや生きていけないよ。

あんちゃん!」

「うぐっ!!」

男は腕で俺の体を薙ぎ払った。
すげえ痛え。

ホースイは、これくらったのにまだ戦うきでいるのかよ。

「あんちゃん。」

俺は泣く子も黙るロデン・トレウス様だぞ！

俺のこの最強無敵の「能力」に敵うやつはいねえってのは常識つてもんだ！」

能力……………。

そうだ！能力！！

忘れてた、能力を持つてるのは俺だけじゃないんだ。

あいつも、いや、もしかしてここにいるやつら全員、能力を持つて
いるってことか……………!?

「じゃあ、あんちゃん。そういうことだ。

もう二度とでしやばるんじゃあねえぞ。」

だめだ。

敵わない。

能力どうこう以前の問題だ。

俺には戦う勇気がもう、残っていない。

「待たせたな。田舎者。

邪魔者が入った。

それともお前の仲間？」

「そんなわけ……………ないだろ。

だいたい……………私は貴様と言ったんだ……………。

仲間に貴様と……………言うわけないだろ……………。」

ホースイ。

ホースイは俺って分かってたのか？

いやもう、今はどうでもいい。

ホースイは俺を庇ってくれている。

声は所々裏返ってるし、体も震えているのに。

どうしてそこまで。

「……………それもそうだな。

ただの一般人か。

残念だな！結局仲間はいなくてよお!!」

「はあー」

ホースイのダガーと男の拳が向かい合う。

結果は変わらず、男が勝った。

それでもホースイは何度も立ち上がり、その都度男は自分の居場所を教えるように挑発した。

ホースイは何度も何度も飛び掛かり、男は返り討ちにした。

俺は、それを見ていることしかできなかつた。

「しつげえんだよ!!」

「づ……………がはっ……………」

5回くらい繰り返し、ついに男は痺れを切らしたのか、今までより重く素早い一撃をホースイに与えた。

ホースイは弾丸のような勢いでギヤラリーの間を抜け、商店の壁に激突する。

見ると、石造りの壁にヒビが入っていた。

「がは……………」

ホースイは口から血を吐き出すと、壁からゆっくり落下し、地面へ倒れた。

「ギルマドン民が……………」

どうせ少額だろうが、貰っというてやるよ!

コイツもな!」

男はホースイを尻目にホースイのツギハギの袋と、もう一つ小さな袋を持ちながら去っていった。

ギヤラリーは各々盛り上がりながら去っていく。

中には、道案内をしてくれた保安官の姿も見えた。

そして誰一人、ホースイに近寄るものはいなかつた。

人が少なくなつた後、俺はホースイを抱え、近くの路地裏に飛び込んだ。

ホースイはまだ息はあるが出血が酷かつた。

血を吐いたことから内臓もやられたと思つたが、俺にはどうすることもできない。

薬を買おうとも、文字は読めないし、金も日本円だからそれも無理

だった。

だからとりあえず、血を拭き、俺の上着をダガーで切ってそれで止血した。

しばらくして、体の出血は止まったが、それ以上なにもできることはなかった。

ホースイの息はどんどん弱々しくなっていく。

どうして俺は許され、この15、6歳の一人で頑張るホースイがこんな目にあわなくちゃいけないんだ。

できるなら、俺が代わってやりてえよ！

「おやまあ、こんなところに御人が。」

路地の方から老婆の声がした。

俺は無意識にホースイを庇うように立っていた。

「どうかされました？」

その娘、酷く怪我をされているようですが。」

老婆は優しく俺に問う。

「どうやらホースイがギルマドンの住人だと気付いていないみたいだ。」

いや、気付いててもいい。

この老婆が、最後の希望だ。

「助けてください！」

このこ、訳あって暴力を受けてしまって。

私はどうしたらいい分からず、途方に暮れていたところです。

お礼はなんでもします！

どうか、このこの命だけでも!!」

俺は土下座をして必死に頼んだ。

だが、老婆は

「そうか。」

と言うと、俺たちの横を通り、建物の裏口と思われるドアを開け中に入ってしまった。

やっぱりだめか。

ギルマドン民に、人権はないのか。

俺は気付くと涙が流れていた。

実力の差を痛感し、ホースイを助けてやれなかった。

あの場を楽しむギャラリーと同じ、俺もただの傍観者だった。

俺にもっと力が合つて、この国のことをわかつていればと無力感に泣いた。

「ほれ、男の方。」

ドアから声がした。

見ると、さっきの老婆が液体が入った瓶を振り、ドアを開けながら俺たちを見ていた。

「なにをしている?」

はやくその娘を入れてやんなさい。

見ての通り、回復薬を醸造してるから。」

俺はその言葉にどれほど救われたか。

目の前がパツと明るくなった気がした。

「ありがとうございます!!」

悔しさとは違う、別の涙を流しながら、俺はホースイを建物の中へ運んだ。

数時間後、もう夕日が射してきた頃。

「う……………ううん。」

「……………ホースイ!!」

ベッドの上で寝てたホースイが目を覚ました!

俺は嬉しくて反射的にホースイへと寄っていた。

しかし、すげえな、あの老婆の回復薬っていうのを飲んだら、呼吸も正常に戻ったし、傷も癒えるし、意識も回復するんだからよ!

「なんだよ。あともう少し寝させろ。」

なんだ、寝起きのカキみたいなのそのセリフは?

まあ、いいか。

起きてくれただけでも嬉しい。

「……………貴様! な……………なにをそこでしてんだ!!」

うわあ、いきなり立ち上がるな!

でも、痛がる様子はないし、本当に治っちまったんだな。

「なに黙って笑ってやがる！」

って、おい！私の服はどうした!? さつきと違うじゃねえか!!

それにどこだここ!?

なんか私にやったのか!? やつたとわかったら貴様を……………おい!

い！ダガーはどこだ!?

お、おい!

いっぺんに質問するな!

と、取りあえず俺は落着いていないとな。

えっと、なんだっけ?

服と場所とダガーか。

「服はこの家の持ち主が貸してくださったんですよ。」

さつきのでしゅっけ……………いや、汚れが酷かったんで。」

危ねえ。

確か、ホースイは聞いたり文字で見ても吐いちやうんだよな。

服を貸してもらった以上、嘔吐させるわけにはいかない。

「それとここは、ビビンニのとある商人?の部屋です。」

持ち主は今、仕事があると出掛けています。

ダガーはその机の上です。」

とりあえずこれで全部だ。

ホースイは納得したかどうか分からないが、ベッドの上へあぐらを

かいてふてぶてしく言った。

「そうならそうと先に言え。」

鈍臭い。」

いや、ホースイが聞くのがはやいんだよ!

でも、それほど元気になれたってことなんだな。

よかったよかった。

「貴様。」

さつきの男のこと、知ってるか?」

ホースイは机の上を指差しながら俺に聞いてきた。

ダガーを取れってことか?

「男……確か、ロデンなんか言ってたような。」
俺は渡しながら言う。

そういえば、どうしてアイツはホースイがギルマドンの住人ってわかったんだろうか。

それと体を通り抜けるあれはいつたい？

「ああ、ロデン・トレウス。」

名前と能力だけは聞いたことあった。

ギルマドンの間でも噂になっていたからな。」

能力……やっぱり、他の人にも能力はあるんだ。

ホースイの能力ってなんだろう？

放水とか………言ったら怒られそう。

「おい、聞いてんのか？」

すみません。

いらん事考えてました。

「……アイツはどういうわけかビビンニに入ったギルマドン民を見付け、暴行を加える。」

やられたやつは何十人と言われ、普通ならステータス剥奪ものだが、ビビンニ民からしては下等なギルマドンを追い出してくれる英雄として崇められているからな。」

「ひどい。」

本当にそれしか言えねえ。

暴力を振るうロデンもそうだが、それを良しとする住人もそうだ。

ギルマドン民の中でもホースイみたいないいヤツはいるのに。（口は悪いけど）

「そして、やつは誰にも止められない。」

物理的にそうなんだ。

ヤツの能力……“透過”のせいだな。」

透過……。

やっぱり、あれはトリックだとか目の錯覚じゃなかったのか。

「あいつは負けなしだ。」

ヤツだと分かっていたら、勝つことはできなくとも逃げることはで

きたのに。」

本当にそうか？

あのときすごくイライラしてたし、気が短いから戦ってたんじゃない？

「ヤツの能力の対処ができていれば……………」

ってどうか貴様！

なぜ私の質問に答えなかった！

すぐにじゃなくても歓声にまぎれて言えただろう!？」

うぐっ…！

それは……………」

「す、すみません。」

謝ることしかできねえ。

結局俺も、ビビンニの住人と同じことしちゃったんだ。

謝っても謝りきれねえ。

「……………まあ、でも貴様がここまで運んでくれたんだろ。

他のギルマドンのやつは、堀に投げ捨てられたって言うし。

これでチャラにしてやるよ。」

や、優しい！

いい人すぎだろ！

ホースイ、本当は何歳なんだ？

「だが、立場は変わんねえからな。」

「はいーホースイさん!!」

立場は変わらなくてもいいし、ツンツンしてくれてもいい。

一生ついて行きてえ！

あ、思わず涙が。

「おい、なに泣いてんだよ。

発言と行動が噛み合ってねえぞ。

それにもうホースイ呼びはいい。馴れ馴れしい。

これからはモニムだ。

いいな。」

「はいーモニムさん!」

「はあ。貴様、無口だと思っていたが、騒がしいやつだな。」

俺はこのとき、一生をかけてその人の役に立ちたいと思う人ができ
た気がする。

こんな15、6の生意気な女なのに。

俺はこの女の内なる優しさに惹かれていた。

「ふー。ただいま、元気になったか？」

夜が更けて、深夜。

もう日にちは変わったかな？

部屋に戻ってきた老婆の声で、俺は目を覚ました。

モニムを見ると、ベッドの上に座りながら壁に寄りかかり眠ってい
る。

可愛い寝顔だ。

てか、ふつうに布団敷いて寝ればいいのに。

「おやまあ、ごめんなさいね。」

起こしちゃった？」

「いえいえ。すみません。こんなに寛いでしまい。

おかげさまで、このこは元気になりました。」

「そうかい。それは良かった。」

老婆はとてこやかな笑顔を見せた。

とても素敵だ。

この笑顔を見るだけで、色んな負の感情がどこかに吹っ飛ぶよう
な、そんな感じがする。

ロゼンに見せてやりてえな。

「ううん……。」

ママ……今日はフオワイがいい。」
ん？

ベッドの方からすげえかわいい声。

え!?今のモニムの声か!?

ぶりっ子の甲高い感じじゃなくて、なんか自然というか、ふわふわ

とした感じっていうか。

俺はベッドの方を見た。

モニムは目をこすってとても眠たそうにしていた。

今の寝ぼけてた？

「何見てんだよ？」

あ、いつものに戻った。

「フオワイか。」

珍しい料理を好むね。

お姉ちゃん、シーフィルの出身かい？」

老婆は優しくそう言いながら、水をコップに入れて俺たちに渡した。

「ありがとうござ……………」

「あー！！」

あなた……………！もしかして！！」

モニム、どうした？

俺がお礼言ってるのに、いきなり大きな声出して。

それにすごく驚いたような顔してるし、失礼だぞ。

そう思っていると、モニムはベッドから飛び降り、コップを机に置き、俺のサイフを取った。

え、ちよつ……………なに？なんだ？いきなり。

「あなた。」

ナライ・フオーさん……………ですよね！

私、ホースイ・モニムと言います！

私は、あなたに会うためにビビンニに来ました。

この中の額全て払います！

ですから、占ってください！」

額全てって……………これ、俺のサイフなんだが！

前言撤回するぞ！おい！

「おほほ。」

そんなに慌てなさんなって。

私はどこへも逃げないよ。

それに、そのお金はあなたのではないでしょ。
返してあげなさい。」

モニムは釈然としない態度で、サイフを俺に返した。
なんか、また怒ってる気が。

ほんと、気が短いな。

「返しました！占ってくださいー！」

「ちよっ、モニムさん。」

つい、声にだしちまった。

モニム、いくらなんでもがめつ過ぎるぞ。

なんか焦ってるのか。

「ですから。占いますよ。」

でも、あなたより前に、その男の方を占いましょう。」

「えー!」「俺?！」

なんで先に俺なんだ。

モニムが苛立ってダガーでも向けられたらどうすんだよ。

それに俺が占ってもらうことなんて……………

あるか、いや、むしろ俺の言っていることの真偽を確かめるのが目的だから、俺が先でも変わらんないんじゃないか。

「どうしてこいつなんかが。」

でも、どうせつまらないことだろうし。

ぱぱっと終わらせてくれるだろ。」

また、心の声聞こえてるぞ。

「さっさと終わらせろよ。」

私の方が上なんだからな。」

モニムは威圧的に俺に言った。

これは相当苛立ってるな。

とりあえず、俺は一步前に出た。

何を占ってもらおう。

目的の方はモニムが言ってくれるだろうからぱぱと終わらせられる……………。

もう無難に明日の運勢でいいか。

「じゃあ、お願いします。」

俺が占ってほしいものは……………」

「それ以上言わなくてもいいです。」

もうすでに占っています。」

え？

どういうこと？

読心術？

フォーさんは俺のことをじつと見たまま動かない。

なにか水晶使ったり変に手を動かしたりしないで、そのままじーつと俺を見るままだ。

なんか、怖い。

しばらくして、フォーさんは口を開いた。

「……………あなた、一回ステータスを開いて見てくださいな。」

「え？あ、はい。」

わかりました。」

俺は言われるがままに指を動かし、ステータスを開く。

このステータス、よく見ると数字の羅列じゃなくて、この国の文字だったんだな。

通りで拒否反応しめすわけだ。

フォーさんは一通り見てから頷いた。

「ニホン……………やはりそうですね。」

ニホン……！

ニホンを知ってるのか!?

よし、これで帰れる！

「カドワキタケルさん。」

あなた、この世界とは別の世界からやってきましたね?」

「え?」

この世界って……………どういう意味だ?

世界って、国?

なんで見たまんまのことをそんなに真剣そうに言うの?

「ピンとこないようですか。」

言い方が悪かったみたいですね。

あなたは転移してきたのですよ。

あなたが元いた世界から、この世界まで。」

「ん？」

え？ ホントどういうこと？

転移？

元いた世界？

全然ピンとこないんだが。

モニムなら分かるかと思って見たが、睨み返された。

呆れじゃなくて威圧っぽかったから多分モニムも分かってないな。

「まだピンと来ませんか。

言葉を変えましょう。

この地域、この大陸、この星、この宇宙に。

あなたの出身地であるニホンはないので。」

え!?

ニホンが……ない!?

どういうこと？

消えたの？

「例としていうのなら、二つの並行した川があります。

その川は決して交わることなく、まっすぐ流れています。なにか

の歪で、あなたという存在だけが、もう一つの川へ入ってしまった。

ということなんです。」

え、えつと、つまりもしかして、俺……。

もう帰れないの!?

「いや、淡々と説明されても困ります!」

理解はできました!けど、頭が追い付きません!」

「おい、貴様、今の川がなんかで分かったのか!？」

モニムはまだわかってないのか!

いや、もうそんなことはどうでもいい!

「フォーさん!どうしてその……えつと……転移をしたとわかったんですか!？」

それと、どうやって帰るんですか!？」

「帰る方法はわかりません。」

私は導くだけです。その導きに、あなたの帰還は出ていませんでした。

わかった理由としては、あなたのステータス。

能力のところがハテナでした。」

導きってなんだよ!？」

もう、分かんねえ!

てかあれ、まだハテナなの?

「ハテナなんですか?」

昨日、炎の能力を遣いましたが。」

「いいえ、あなたの能力はハテナ……すなわち『不明』なんです。

これは別世界から来た転移者の能力です。

実態は各々により変化しますが、ハテナは共通します。」

「は、はあ。」

いや、説明聞いてもわからない。

てか、分からないことだらけだ。

そもそもなんで口頭で言語通じるんだ?

なんで、能力がない世界のやつが転移すると能力使えるんだ?

うーん。

「なんか、こう不思議ですね。」

別世界から来たから、能力『無し』かと思いましたよ。」

「ほえ、能力なし。」

あなた、来たばかりなのによくその存在を知っているね。」

「え?」

その存在……?」

どういうこと?

「それはこの、モニムさんから……」

っとうわ!

なんか、モニム、すげえ睨んで……いや、怯えてる?

俺、なんかやばいこと言った?

「そうですか。」

では、カドワキタケルさん。

あなたの占いは一旦ここでストップしましょう。

大きな導きが晴れたので、ようやくホースイ・モニムさんの占いができます。」

え？ 終わり？

まあ、色々疑問が残るが、占いつてのはそういうもんか。

次はモニムだが……：

「アホンダラが、アホンダラが、アホンダラが、アホンダラが、」

なんか連呼して震えてる。

ホントに俺やばいこと言ったの？

「ホースイ・モニムさん。」

怯えることはありません。

出会ったときから分かっていました。

私の導きは均等です。

あなたの願い、占ってあげましょう。」

二日目

ホースイ・モニムの願い

「モニムさん。どうしたんですか？」

俺は震えて蹲るモニムに声をかけた。

見る限り血はないし、吐き気を催したわけではなさそうだが。

占ってくれるって言ってるのに、本当にどうしたんだ？

「カドワキタケルさん。

ホースイ・モニムさんの説得は私になります。

あなたは離れてください。」

占い師のナライ・フォーは俺に諭す。

だが、そういうわけにはいかない。

心配なんだよ。

もう二度と、苦しむところは見たくねえ。

俺はモニムに体を寄せ、背中を撫でる。

相変わらずモニムは言葉を連呼しているが、何を言っているのか聞

き取れない。

「いいから！離れなさい！

すぐにです!!」

「は、はい！」

フォーさんの焦りに満ちた声に、俺はビビり後ろに飛び退いた。

その瞬間だ。

「アホンダラがアア!!」

モニムは俺に向かってダガーを一振りし、切ろうとしてきた。

危ねえ、フォーさんが注意してくれなきや、心臓や肺が真つ二つ

だった。

「モニムさん……!?!」

俺ですよ！門脇です！」

俺はモニムに説得するが、モニムはダガーを向け俺を睨んだままだ。

なんだろう。

モニムから感じる、冷たく人を寄せ付けないオーラは。

そのとき、俺は思った。

さつき俺がビビったのはフォーさんの声でなく、このオーラだと。

「貴様……下手なことは言うなといったはずだ!!」

世界がどうか私には分からないが、無知な貴様がこれ以上ものを口にすんじゃない!!」

モニムは涙目で俺に捲し立てる。

なんで俺怒られてるの!?

理由を聞きたいが、モニムの殺気のようなオーラで声が発せない。

「ホースイ・モニムさん。

あなたが背負うものは導きが教えてくれました。

彼には悪気はありませんし、私もあなたに悪いことはしません。

どうか心を静めてください。」

フォーさんは優しくそう言いながら、モニムに近づく。

最初から、フォーさんに頼むべきだった……。

お願いします!フォーさん!

「近づくんじゃねえ!」

導きがなんか知らねえが、お前に私の何が分かるっていうんだ!!」

だめだ、モニムはすごい興奮してある。

フォーさんにもダガーの切っ先を向けやがった。

「わかりません。

ただ私は、あなたの願いを叶えるためのお手伝いをしたいのですよ。」

刃を向けられても、フォーさんは歩みを止めず、安定した声で説得を続けている。

なんていう精神力だ。

だが、それでも危険だ!

モニムは脅しているだけだろうし、切っ先も寸止めしようとしていないかもしれない。

フォーさんもきつとそうすると思ってる。

だが、モニムの今の精神じゃ皮膚を搔っ切ってしまいかねない！
どうする!?

あのダガーを燃やす？

いや、そんなピンポイントに炎を発射する力はまだ備わってねえ！
くそ！

あのダガーを離してくれたら！

何かの拍子に俺の手元へ来てくれたら！

俺は心の中で、そう強く念じた。

そして、無意識にダガーに手を伸ばしていた。

「な……なんだ!？」

「む……」

するとなんと、モニムの手にガツチリ掴んであるダガーがガタガタ
震えだした。

最初はモニムの極度の緊張かと思ったがそれは違った。

ダガーはモニムの手からすっぽ抜け、そして、

「うわ……！とっ!!」

俺の伸ばした手元へ飛んできた。

こ……こええ。

うまく掴まなきや、そのまま刺さって御陀仏だった。

「き………貴様！

なにをした!？」

細工しやがったのか！私が脅すから！」

モニムは驚きと怒りが混じった表情で俺に言う。

ていうか、脅してた自覚は一応あったのか。

「いえー細工なんてしてないですよー！」

本当にそうだ！

願うと勝手に………ってあれ、こういうの前にもあったような
……。

「これは、あなたの能力がやったことです。

カドワキタケルさん。」

「え?」「なっ!？」

能力……？

俺の能力って炎じゃないの？

なに？俺が知らないだけで炎って磁力生み出す力あるとか？

「お前デタラメ言ってるじゃねえよ！

コイツの能力は私も見たし、まったく別の能力だった！

能力はふつう一人に一つのはずだぞ！」

お、モニム、俺の言いたいことを言ってくれた。

でもさつきより顔も耳も赤いし、涙目っていうか声も泣いてるような感じだったな。

もうオーラも感じないし。

「いいえ、あれはれっきとした彼の能力です。

彼は別の世界から来ました。なので、ふつうのセオリーから外れて
いるんですよ。」

フォーさんは淡々とモニムに説明する。

モニムはしばらく呆然と立ち尽くすと、突然泣き出した。

声はださなかったが、涙を滝のように流している。

そんな泣くことねえだろ。

珍しい事なんだし、メンバーなんだから、誇ってほしいとこだ。

「カドワキタケルさん。

あなた、ホースイ・モニムさんの能力は知ってます？」

「え、いや。知りません。」

いきなりどうしたんだ？

モニムの能力なんて聞いて。

あの女、自分の能力のこと言わないよな。

戦闘でも使ってなかったし。

「言うんじゃねえ！」

涙声だが、しっかりとした発音でモニムが叫んだ。

そんなにいやなのか？

俺なら能力があるなら自慢したいんだがな。

「ホースイ・モニムさん。

彼にあなたの能力のことは告げるべきです。

彼とあなたはいずれ、大きな役割を果たす。

そう導きが教えてくれました。

ですから、告げるべきです。

そうしなければ、あなたはつらくなる一方ですよ。」

フォーさんは優しく言うが、モニムは顔を逸し、ずっと流れる涙を拭き続ける。

つらくなる……？

いったいどういうことだ？

「本当は彼女の口からがよいとの導きがありますが、仕方がありません。」

私から告げましょう。

ホースイ・モニムさんの能力は………。」

なんだ？

モニムの能力！

かっこいいのか………それともプリティなやつ？

え、もしかしてあのぶりっ子な背伸びした色気？

「〃無し〃だよ。」

「え？」

「おや、まあ。」

フォーさんにかぶせるような形で、モニムが言った。

確かに言った。

〃無し〃だと。

「無し………無しってどういうことですか？」

俺は思わずモニムに聞いていた。

モニムは確かに「能力はふつう一人に一つ」と言っていた。

それなのに、無しって。

「貴様。本当に鈍臭いな。」

無しって言ってんだ。

どうだ？幻滅したか？グループを解消しなくなったか？」

「い、いえ、それは……。」

ホースイは自虐的に言った。

すぐにそれを否定しなくちゃいけないのは分かっている。分かっているはずだが、頭の処理が追い付かないんだ。

「なんだよ。なんとか言えよ。」

「それは」じゃ分かんねえよ。」

「え……えつと……その。」

やばい。なにか言わないと。

でもなにをいえばいいんだ。

能力無しだと知らないで、これ見よがしに複数の能力を使ったことを謝る？

どうして能力がないかと聞くとか？

あー！もう、それじゃ、ただモニムが惨めなだけじゃないか！

俺はかわいそうだとか、幻滅だとか思っちゃいねえ。

だってモニムは強えし、俺を守った強い精神力があるから。

だが、あんな深刻そうに言われちゃどうしようもできねえよ！

「そうか、もう口を効きたくねえか。」

モニムは侮蔑な目で俺を見ながら言った。

そのとき、俺の心にぼつかりと大きな穴が開いたきがした。

「ラナイ・フォーさん。」

先程は無礼な口を効いてすみません。

占いは結構です。こんな私を泊めてくださり、ありがとうございます。す。」

モニムはフォーさんにお辞儀をすると、何も持たずにドアに手をかけようとした。

おい、今は深夜だぞ。

年頃の女が出るには危ねえよ。

「いいえ、占いはもうしてあります。」

あなたのご両親のことですよね。」

フォーさんが告げると、外にでようとしたモニムは足を止めた。

両親？

そういえば、モニムは一人暮らしだったよな。

どうしてあんな田舎の村に一人でいたんだ？

「ホースイ・モニムさん。

あなたの願い、それは愛ですね。

それを叶えるため、あなたはご両親に会いたがっている。」

「……………」

モニムは扉を閉じ、無言でその扉を見続けていた。

愛？

家族の愛ってことか？

そういえば、寝ぼけたときに家族のことを言ってたような。

「もう一度、愛が欲しい。」

だけど、居場所がわからない。

だからここへ来たのですよね？」

「……………」

ママとパパは。

どこに、いるんですか？」

モニムは扉におでこをつけ、そういいながらまた泣いた。

そこまで両親に会いたいのか。

そうだよな。

大人びではいるが多分まだ子供なんだよな。

「ホースイ・モニムさんのご両親。」

導きによると、この6地域の中央の地域、「セイン域」にいます。」

「セイン域……………」

あの、セインに？」

ホースイは驚きを隠せない表情で言った。

セイン域？

6地域？

また分からない単語が……………」

「セイン……………」

モニムはそう呟くと、思いつきリドアを叩いた。

おい、人の家。

「無理だ。セインなんて。」

私が行けるところじゃない。

なんだよ。……恥晒して、現実突きつけられて終わりかよ。」

「モニムさん……。」

多分また、心の声が漏れてんだろうな。

よく分かんねえが、セイン域つてのは危ねえとこなのか？

俺が手伝ってやりたいが、もうモニムの信頼はないに等しいもんな……。

「無理ではありませんよ。」

ホースイ・モニムさん。」

「……気休めはいいです。」

ありがとうございます。これで楽に……。」

「いいえ。気休めではありません。」

あなただけでは無理でもいるじゃないですか、あなたのメンバーが。」

フォーさんは俺の方を見た。

そうだ。俺はモニムの……ホースイ・モニムとグループを結んだんだ。

メンバーが悩んでいるのに、分からないから何もできないって言い訳みつけて、ほったらかすなんて、そんなのグループのリーダーじゃねえ！

「モニムさん。」

あの、事情が分からずモニムさんを傷付けるやつな発言をしてしまい、申し訳ありませんでした。

お詫びと言ってはなんですけど、モニムさんの願いを叶えるのを手伝わせてください。」

俺は心の思うまま、言葉を出し、土下座し頼んだ。

俺ができるのはこれくらいのことだけだ。

「……ダガー。」

「えっ？」

「ダガー、返せよ。」

なに、下手な真似はしねえよ。

コイツは形見なんだ。

それに貴様は鈍臭いから、ソイツがないと危ねえからな。」
モニムはいつの間にか涙を引つ込め、いつも通りの口調で俺に言った。

えっと、これって……………？

「ほら、早く返せよ！

貴様はホントに鈍臭えやつだな！」

「は、はいー！」

俺は慌ててダガーをモニムに返した。

モニムはいつものように呆れた感じの表情で俺を見ながらダガーを受け取り、胸の鞆に納める。

本当にいつも通り、さっきのいざこざがなかったかのようだ。

「貴様……………」

「はい。」

「手伝うのは勝手だが。

足引つ張るんじゃないよ。

私の方が立場は上なんだからな。」

この物言い！

このセリフ！

モニムは俺を許してくれたんだ！

素直に頼めないなんて、ツンデレだなー！

「おやまあ、あなたたち、いいグループになれそうですね。」

一部始終を見ていた、フォーさんが茶化すように言った。

モニムはどう思っているかは分からないが、俺はなんか嬉しかった。

「それにしても、あなたたちのグループ名はとてユニークですね。」

「グループ名？」

そんなのあったのか。

どんなのつけたんだ。

「貴様、それも把握してなかったのか。

ホントに無知だな。」

いや、これはモニムが言ってないのが原因だろ！

ステータスに書いてたかもだけど読めないし。
でも気になるし、聞いてみよ。

「なんてつけたんですか？」

「ホーカドだ。」

「え？」

ホーカド……？

「聞こえなかったか？」

ホーカドだ。いい名だろ？」

ホーカドそれって、もしかして。

「ホー」スイと、俺の「カド」ワキを取って、ホーカド？

「ぷー」

やべえ、面白え！

この女、ネーミングセンスゼロじゃん！

思わず吹き出しちゃった！

「おい！貴様！

今、笑ったな！どこに笑うところがある!？」

お、おい！

さっそくダガーを向けるな！

「す、すみません。」

「あはは。

ほらお二人さん。もう夜が深いんだからもう寝なさい。

まだ導きが残っています、私眠くてだめだね。

早朝に告げますね。」

フォーさんはそう言うのと、椅子に腰掛けこっくりこっくりと眠ってしまった。

寝付くのはやいな。

俺もこれくらい早く眠れたらな。

寝付き悪いんだよな。

「おい、貴様。」

って、うわ、モニム。

いつベッドに上がったんだよ。

「いつまで床にへばりついているんだよ？」

奥にソファがあるから使わせてもらえ。」

へばりついているって………土下座知らない？

ジャパニーズ土下座。

まあ、いい。

今はとりあえず寝よう。

安心したら眠くなってきた。

おやすみ、モニム。

モニムの両親に会えるよう、お互い、頑張ろうな。

「貴様、起きろ。」

おい。」

んん、なんだ。もう朝か？

なんか凄い変な夢見た気がするな。

能力が何とか。

そういえば、凄くかわいいけど口が悪い女の子がいたな。

「起きやがれ、この。」

もう日が昇るぞ。」

そうそう、こんな感じで高圧的で………つてん？

俺は目を開け、あたりをキョロキョロと確認した。

そこは間違いなく、夢のまま、占い師の家の中だった。

「起きたか。」

「あ、はい。」

モニムの言葉にとりあえず、テキトーに返事する。

やっぱこれ、現実？

そういえば、昨日一回ここで寝てんじゃん！

モニムが回復したのが嬉しくて夢か現実か確かめられなかったけど。

嘘だ………本当に異なる世界に迷い込んでるのかよ。

「なにボートしてんだよ。」

貴様、寝起き悪いな。」

ショックを受ける俺に、モニムは呆れた様子で言う。

いや、モニムも寝起き悪いというか、寝ぼけてたじゃん。つていうか、本当に眠い。

睡眠不足感が否めない。

今、何時だ？

窓から見える外も真っ暗だし。

「モニムさん。今、何時なんですか？」

「5時くらいだ。」

深夜に一回起きたから少し遅れちまったな。」

「5時!？」

モニムは首にさげた懐中時計を見ながら言った。

え？5時？

そんな早く？

つてか遅れた？

モニムいつも何時に起きてんだよ!？」

いや、待て俺の5時とモニム……つていうかこの世界の5時は違うかもしれない。

「なにを驚いている？」

起こすの遅すぎたか？

悪いな。私も今、起きたとこだ。」

「いや、そうじゃなく。」

逆、早すぎる。

いつも起きるの7時くらいだぞ、俺。

いや、確証はないけど、なんとなく、そんならいな気がする。

「あら、お二人さん。」

早起きなね。」

フォーさんが扉を開けて中に入ってきた。

早起きつていうことは、やっぱ5時はニホンと同じ、早朝つて認識でいいのか？

「おはようございます。」

偶然にも同じタイミングで、俺とモニムが挨拶した。

すると、モニムは俺のことを睨みつけた。

「貴様、被せてくるんじゃないやねえよ。」

私の方が上だからな。

「貴様は私の後に言え。」

「は、はい。」

そこも拘るのかよ。

ホントにプライド高いな。

「おはよう、お二人さん。」

これ、お口に合うか分かりませんが、よかつたらどうぞ。」

フォーさんはそういうと料理が乗った皿を机の上に置いた。

湯気が立ってる。

いい香りだ。

「「あり」がとうございます。」

「ありがとうございます。」

俺たちは机のそばの椅子に座った。

なんだろう、この料理。

たくさんの見たことない野菜がたっぷり入ったシチューみたいだ。

「いただきます。」

「どうぞ、召し上がれ。」

俺はスプーンを取り、取りあえずスープをすすった。

そこらへんの食べ方は同じなんだな。

うーん、意外と甘い。

汁物なのにデザート食べてるみたいだ。

この世界はこういうのが好きなのか？

モニムはどうだ………ってえ!?

「モニムさん? どうしました?」

泣いてる。

そんなにキライなのか、これ。

「うっせえ、こっちみんな。」

それに、野菜とスープ一緒に食うもんだぞ。」

モニムは俺から目を逸して言った。

アドバイス、ありがとう……。

「さすが、ホースイ・モニムさん。
食べ方を分かっていますね。」

「当たり前です。」

だつて………私の大好物なんですよ……。

何年経っても、忘れるわけないじゃないですか。」

モニムは涙声で感情的に言う。

大好物なのか、じゃあ何で泣いてたんだ？

ん？何年経っても？

何年も食べてなかったってことか？

ってことはこの料理って！

「すみません、フォーさん。」

用意してくださったのは嬉しいです。

ですが、私、両親に会うまで食べないって決めてるんです。

この、フォワイは。」

やっぱり、寝ぼけてたときに言つてた料理だ。

これがフォワイか。

モニム、結構甘いのが好きなんだな。

両親に会うまで食べないか………。

本当に会いたいんだな。

「そうですね。」

わかりました。後ほどドウェスバッファの焼き肉を持ってきます

ね。

昨日から何も食べていないのですよね？」

え、あのドウェスバッファってあの化け物!?

あいつ食べるの？

そういえば、ギルマドンでモニムが回収お願いしますとか言つてた
な。

「大丈夫です。私、能力無しなので、消費が少ないんですよ。」

そんなこと言つてないで貰えよ。

財布盗られてんだし、いくら消費が少なくてもしつかり食べないと

両親が心配するぞ。

「そんなことより！」

導きの続きを教えてください！

セインに入るには資格が必要なことは知っています！

その資格の内容ですよね！」

モニムは凄いい勢いで机に手をつけて前に乗り出す。

お、おい。衝撃でフォワイが少し溢れたぞ。

チャンスを掴みたいのはわかるが、少し落ち着けて。

「そんなに慌てないでくださいな。」

それに導きはそんなに都合がよいものではありません。」

「え……？」

じゃあ、わからないんですか？」

モニムはショックを受けたような顔をして、前のめりの体をもとに戻した。

早とちりだったが、ちよつとかわいそうだな。

「わからない……というわけではありません。」

ホースイ・モニムさん。

あなたはビーウエス域の村や町はいくつあると思いますか？」

「え？」

それは、ここの大都市ビビンと、吹き溜まりの村のギルマドンの2つですよね。」

「そうですね。」

ですが、私の導きにはもう一つ村があると出ました。」

「え!？」

モニムは驚いた顔をしている。

モニムが何年その……ビーウエス域？に住んでいるか分からないが、住民でも知らない隠された村があるってことか！

おおー！

なんかそういうの興奮してくる！

「村の名はゴルム。」

ここより南東へくだった森の奥へあります。

「その長に会えと、導きはそう教えてくれました。」

「ゴルトム……。」

そこに行けば、セインに……!」

モニムの体が震えている。

武者震いか?

顔もなんだか、希望に満ちあふれているし、年相応って感じだな。

「ホースイ・モニムさん、これであなたの占いは終わりです。」

「ご武運を祈ります。」

「はい!ありがとうございます!!」

モニムは不器用な笑顔で可愛らしく言った。

もしかしたら、これが本当の素のホースイ・モニムなんじゃないかな。

ホント、ずつとこうしてくれたりいいのにな。

「おい、貴様。」

って思ったそばからそうやって……。

でも声が嬉しそう。

「なんですか?」

「金だ。財布出せ。」

ああ、そうか……って言い方よ。

俺はモニムのATMじゃないんだから。

「いえいえ、お代は結構ですよ。」

寧ろ、こんなおぼばの気まぐれに付きってくださいだったのでからね。」

俺がポケットから財布を出そうとすると、フォーさんは優しい声で俺につげた。

本当に優しいな。この人。

人ができてる。

「それではカドワキタケルさん。」

あなたの導きの続きもしましょう。」

「俺の?」

ああ、そういえば、俺もまだ途中だった。

モニムの正体ってか能力が驚き過ぎて忘れてたよ。

「まず、なぜこの世界に呼び出されたかですが、導きには何もありませんでした。」

「え？え、それじゃあ、理由もなしにポンと来たんですか？」

「そういうわけではありません。」

導きが出る人と出ない人がいてあなたは出ない人だったようです。」

「はあ。ん？待ってください、出る人と出ない人と言いますと、俺以外にも別の世界から来た人がいるんですか？」

本当にそれに尽きる、なんか当然のように言われてスルーしそうになったが、同じような人がいるとすれば、帰れる方法がわかるかもじゃん！

「ええ、いますよ。」

よし！

「ですが、彼らのその後の動向は不明です。」

私は導くだけの存在。その後どうするか知る権利はありません。」

うーん。それじゃ、だめか。

でも、少し希望があるかないかで違うな。

「おい、貴様！待て！」

いきなり難しい顔をして聞いていたモニムが俺に叫んだ。

「なんですか？」

「帰れるかって、さっき貴様聞いたよな？」

もし、貴様が帰れる方法を私がセインに着く前に知ったら、貴様は帰っちまうのか？」

「え？？」

なんで、そういう質問を？

それに「帰っちまうのか」って帰ってほしくないような言い方だけど。

いや、夜に願いを叶える協力するって俺が言ったんだから約束破るなって意味だよな。

別に「そういうやつ」じゃないよな。

「いいえ、約束を果たすまで俺はこの世界にいるつもりです。」

「……………当たり前だ。何かツッコついている。」

モニムはそう言うのと俺から顔をそらした。

照れ屋だなー。

つてまだ占いの途中じゃん。

「すみません、フォーさん。」

「いえいえ、仲が良くてなによりですよ。」

グループの仲は良好が一番です。

では、次にあなたの能力ですね。」

「能力……………」

これが一番気になるんだ。

どうして能力は一人に一つなのに、俺は炎と……………なんていうんだ、引き寄せ？念力？……………なんだ？

「あなたの能力は深夜の際に告げたように不明。」

これは転移者特有のものです。

この能力からは実に多種多様な導きが出ました。

そして、あなたの導きは「日替わり」です」

「……………日替わり？」

なんだ、日替わりって、ランチか？

「導きからはそれしか出ませんでした。」

意味はご自身で考えてください。

カドワキタケルさん。これで、あなたの導きは以上になります。」

「はい……………。ありがとうございます。」

なんか、呆気ないな。

釈然としない。

「あ、そうです。」

お代は頂かないのですが、少しお財布の中身を確認してもよろしいですか？」

「え？あ、はい。」

わかりました。」

財布？なんでだ？

くすねる気か………って思ったが、モニムのあの笑顔を見たら、全財産やつてもいいかなって思うな。

いや、それだったら、モニムの財布盗られてるから俺たち一文なしになるじゃん、うん、いまの取り消し。

そう思いながら俺は財布を机の上に出して、中を開けた。

「なんだ？紙切ればかりじゃないか？」

ただじゃなかったら、貴様訴えられてたぞ。」

モニムが札を凝視しながら言う。

財布を勝手に使おうとしているやつがどの口を。

「ほお、これがニホン円つてもものですね。」

「ここでは使えないので、両替をしておきましょう。」

「いいんですか、ありがとうございます。」

おお、危ない。

まあ、確かに一つ海を超えれば使えない金を別の世界で使えるわけがないよな。

「貴様、硬貨こんくらいしか入ってねえよな。」

「ピンボーか？」

「……………」

モニムがさつきじつと見ていた札は1万円だ。

だいたい10万は入ってるから、まあある方だと思うぞ……………多分。

「私、硬貨のコレクションが趣味でしてね。」

こうして異世界から来た方のお金を売ってもらっているのですよ。

ほれ、このくらいでよいかな？」

そう言っつてフォーさんが出したのは巾着袋に硬貨がいっぱい入ったものだった。

フォーさんが中身を見せたところ、モニムは目を光らせ飛びついた。

「金貨………こんなにたくさん！」

ナライ・フォーさん！いいんですか!？」

「ええ、大丈夫ですよ。」

その財布の中身がどのくらいの価値かは分かりませんが、異世界か

らのレア物ですから。」

「さすが、ナライ・フォーさん！」

ありがとうございます！」

そんな適当でいいのかよ！」

確かにこの人、有名な人らしいけど、気前が良すぎる。

「これは私が預かる！」

貴様はまだ物の価値が分からないからな！」

「は、はい。」

この女、金にがめついな。

まあでも、多分大金なんだろうな。

俺もドラマでよくあるアタツシユケースいっぱいの万札が目の前にあったら、こうするかもしれないし。

「フォーさん、ありがとうございます。」

「いえいえ、役に立ててくださいね。」

この世界に来た以上、なにか使命があるはずです。

その使命を果たす手助けになれば私も嬉しいです。」

「はい。」

使命か……………。

まだ分からないけど、俺は使命を果たすために来たのか。

ま、よく分からないし、取りあえずモニムの夢を叶えるのを協力するか。

この『日替わり』の能力でな。

透過の男

あれから俺たちはすぐに出掛けることにした。

モニムは居ても立っても居られないようだったし、朝の方が人通りが少ないからな。

家から出るとき、フォーさんは俺たちにドウエスバッファの焼き肉と、回復薬を2つ渡してくれた。

それと、血のシミがすっかり取れたモニムの服も。

本当にお世話になったな。

いつか恩返ししたい。

俺たちはフォーさんに礼を言い、路地裏の更に奥を進んでいく。なにせ、この奥に使われなくなった街の出入口があるらしい。

俺たちが入った出入口以外はすべて封鎖されてるのだとか。

「モニムさん。」

その肉、食べないんですか？」

「いつ食べても同じだろう。」

フォーさんから受け取ったものうち、俺は回復薬を、モニムは焼き肉を持っている。

歩きながら食べるためと思ったが、全然手、つけないな。

結構、ぶ厚く切つてあるな。

いい茶色してるし、美味そうだなー。

「でも、肉ですよね？」

早く食べないと腐ってしまうのでは？」

「ドウエスバッファの足の肉は日持ちがいいんだ。

覚えてとけ。」

「は、はい。」

へー。便利だな。

じゃあ俺も火の能力を最初に使ったとき、丸焼き程度で止めればよかった。

「貴様は喉が渴いても、そこからへんの水感覚で回復薬を飲むんじゃないぞ。」

「貴重なもんなんだからな。」

「分かっていますよ。」

そんな大事なものだって、俺だって分かる。実際、効果をこの目で見てるんだし。

ってか、せつかく金貰ったんだから薬屋で買えばいいんじゃない。

それと折れた剣の代わりとか。

「モニムさん。」

フォーさんから、お金受け取ったのですから、ここで剣とか薬とか買わないんですか？」

俺が言うと、モニムはいつも通り俺を呆れた表情で見してきた。

「貴様、馬鹿か？」

こんなところでチンタラしてる暇はねえんだぞ。

本来なら私はロデンの仲間回収されて、堀に捨てられているところだぞ。

そんな状況で呑気に買い物ができると思うか？」

「すみません。そうですね。」

確かにそうだ………。

頭が回らなかった……。

っていうか、モニムはこういうことに関しては頭いいんだな。

それから少し歩いたところで、道は鉄格子で塞がれていた。

ここまですつと道は曲がらず真っ直ぐ行ってたけど、間違ったのか

？

「貴様、奥に木箱あるだろ。」

あれ、引っ張れるか？」

「え？」

木箱………？

確かに鉄格子の間から見えるが、引っ張って何するんだ？

「モタモタするな。やれ！」

「は、はい！」

俺は取りあえず、真夜中でダガーを引き寄せたようにやろうとす

る。

が、どうしたものか……やり方を忘れた。取りあえず一か八かで、力んでみたり、手招きしたり、綱引きのようにするが、無理だった。

「貴様……。」

何やってんだ？」

やべえ、モニム怒ってる……。

えっと……は！そうだ!!

できないなら、燃やせばいい!

火の能力は何度もできたからやれるはずだ!

いけえ!

俺は手をかざし、炎を出そうとした。

だが、炎はでなかった。

あれ、なんで？火の粉一つ起こらない。

昨日はできたのに……!?

「もういい。私がこじ開ける。」

モニムは呆れた様子を見せ、鉄格子へと歩き出す。

「モニムさん。待ってください。」

もうちよつとだけ。」

本当にもうちよつと、多分感覚を忘れてるだけだと思うから。

俺はモニムを引き止めようと右手を翳した。

「うわ!？」

すると、モニムの体が浮かび上がり、俺の右手までまるで磁石のようにくっついた。

え、何が起きたの？

「貴様。」

ふざけるのはいいい加減にしろよ。

なに私を引っ張ってんだ。」

「す、すみません。」

モニムは怒りに満ちた表情で俺に言う。

本当に申し訳ない。

俺は謝り、力を抜くとモニムの体は右手から離れた。

これで引つ張る感覚はわかった気がする。

もう一度、今度はあの木箱でやってみよう。

俺は木箱に手をかざし、力を込めた。

「おー」

すると、木箱はカタカタと音を鳴らし、空中へ少しばかり浮くと、勢いよくこちらへ飛んできた。

「うおー」

鉄格子があるとは言え、怖くて思わず声を出しちまった。

木箱は鉄格子にぶつかり、その衝撃で鉄格子に一人通れるくらいの隙間ができた。

すごい荒業だ……。

「できるなら最初からやれ。」

モニムはそういういながら、そそくさと隙間を通る。

そう言われても気付いたのさっきなんだよな。

「なにやってる？置いていくぞ。」

溜息をつく俺にモニムは催促する。

ホント、早くここから出たいんだな。

俺は鉄格子の隙間を通り、モニムの元へ向かおうとした。

……………ん？

今、なんか後ろから物音が聞こえたような？

「貴様ー行くぞー」

やべ、モニム、カンカンだ！

多分、音は気のせいだな。

「すみません。」

それから俺たちはまた少し歩いた。

すると、薄暗い路地の向こうに光が見えた。

あれは、出口か？

「貴様、行くぞ。」

モニムはそう言う光へと走って行く。

「ちよ、モニムさん待ってください。」

確かに、嫌なことがあった街だし、すぐに出たいよな。

俺たちは路地裏を走り抜け、大きな広場に出た。

モニムは足を止め、あたりを確認する。

待ち伏せされていないかの確認か？

用心深いな。

にしてもここ大きいなー！

でもなんだか寂しい。

昔、使われて広場なのか。

封鎖される前は屋台とか出されて盛り上がっていただろうな。

「キョロキョロしてないで行くぞ。」

モニムはあたりを確認し終わると橋の方へ歩き始める。

取りあえず、何もなさそうだ。

隠れるようなものもないし、橋の前の左右対称には街灯があるが、

あの後ろに隠れることはでき……………

ん？

なんだ？

幻覚か……………今、左の街灯が動いたような？

「何をしてるんだ？早く行くぞ。」

モニムは5mくらい後ろにいる俺に、早く来いと促す。

モニムは気付いてない……………じゃあ、俺の勘違い？

俺はもう一度、動いたと思う街灯を見た。

だが、街灯におかしな様子はなかった。

なんだ……………思い違い……………！

では、ない！

やっぱりこの街灯動いてる！

さつきは左右対称にあったのに、今は左の街灯が少し近付いている

！

モニムに教えなきゃ！

ってやべえ、もう街灯の近くにいる！

くっ……………言葉で伝えても、モニムは相手にしてくれるのか？

いや、今はどっちでもいい！

「モニムさん！」

危険物から遠ざけるだけだ！

俺は叫びながら、能力を使いモニムを引っ張った。

「うわー！」

「ううえ……!?」

引っ張りながら俺はモニムの驚く声とは違う、素っ頓狂な声の方を見た。

うわ！気持ち悪い！

街灯に人の顔が浮かび上がり、柱から手が飛び出していた。

化けていたのか？

俺はあまりの気持ち悪さで力が抜けていた。

すると、引っ張られる途中だったモニムへの力がなくなった。

「うわっと。」

なんだお前！」

モニムは後ろに転びそうになるが、体勢を立て直し、街灯の顔を思い切り蹴飛ばした。

「ぎゃひんー！」

すると、街灯は普通の人間へと戻り、力なく倒れていた。

モニム強え……。

「やっぱ日雇いじゃだめじゃねえか。」

ケチリやがってよお。」

突然、どこかから声が聞こえた。

俺はその声をききふと身構えていた。

モニムを見るとダガーを構え、身構えている。

やっぱり、あいつの声だ。

どこだ？どこにいやがる。

「貴様、もつと寄れ。」

はやく、私の方へ。」

俺が声の主を探していると、モニムは手招きしながら小声で俺に言った。

「ですが。」

「だけど、近付くのは危険だ。
纏めてやられるかもしれない。」

「何をしている。」

「あいつは不意打ちはしない。」

「いずれ姿を現す。」

「だからこい。」

「……………」

「俺は取りあえず、モニムに従うことにした。」

「色々疑問は残るが、従わないと絶対モニム折れないだろうし。」

「つたく、捕えて見世物にしようとしたのによお！」

「能力の割に雑魚だったじゃねえか！」

「ギルマドン民になんかやられちまって！」

「なあー!!!」

「え!?!」

「声の主が姿を現した……………橋の下から！」

「通り抜けたのか!?!」

「ってかなんでそんなところに!?!」

「おいおい! やっぱりあんちゃん、グルだったじゃねえか!?!」

「見捨てたのに仲良しこよしか?」

「ぐっ…………胸に刺さることを。」

「…………気にするな。」

「貴様。私になんとか後ろに回る。」

「そのとき、ダガーを固定しろ。いいな。」

「え、あ、はい。」

「おお、いきなり作戦を。」

「だから近づけと言ったのか。」

「てか、固定…………!?!」

「道中試したが、俺は引き寄せることしかできねえぞ…………!」

「いや、でももしかしたらできるかも。」

「それにしてもなぜ、あいつが…………ロデンがこんなところにいるん

だ？

いつ見付かったんだよ？

まさか、あのときの物音か？

それからつけて来たのかよ！

「田舎者！

逃げ切れたと思ったか？

残念だね！さっきの鉄格子にはセンサーがかかってんだよ！

それから………おっと、その先を言うのは契約違反か………。

とにかく！お前が持ってた金はすぐにすわれちまったし、薬は全部吐き気どめじゃねえか！

旅行でも行く気だったか？

夢見てんじやねえよ!!」

くっ………ホント、ムカつく奴だ！

とつちめてやりてえ！

この街の英雄だかなんだか知らねえが、そこまで卑下していい理由にはならねえぞ！

「貴様。感情的になるなよ。」

俺の怒りが通じたのか、モニムはそう言った。

だが、モニムの声はいつもより冷たかった。

モニムも、静かに怒ってるんだ。

「田舎者。

お前の身体能力には驚いた。

お仲間さんの声と同時に後ろに引くなんてよお！」

………！これって、まだ俺の能力に気付いていない！

モニムも同じことを思ったのか、俺と顔を見合わせる。

「チャンスがあればいつでもいいけ。

強気でいいぞ。」

「はい。」

作戦は決まった。

後は、成功するかどうか。

だが、なぜロデンはべちやくちや言って攻撃してこないんだ？

動いてくれないと、後ろは橋だから挟み撃ちができねえじゃないか

！

「なあ、お前ら。」

仲間ってのは強いほうがいいぜ。

使えねえやつは逆に迷惑だからな。

こいつのように!!」

「……!!」

酷え……!!

ロデンのやつ、あの街灯の男を堀に投げやがった!

いくらなんでもあの仕打ちは……!!

「はああ!!」

ってモニム!!

感情的になるなって言っておきながら、あの女!

焼き肉の袋を投げ捨て、ロデンに対して走り出しやがった!

「なんだ、田舎者!

あんなやつのために怒るのか?

お前も無能だから、感情移入ってか!」

ロデンは昨日のように拳で向かい打とうとしている。

そして、昨日ように拳とダガーが交わ……らない!

モニムはダガーを向けてない!

「なに?」

ロデンは咄嗟に体を透過し、モニムはそこを通過し、顔めがけてダ

ガーを投げた。

しかし、ロデンは全身を透過しているから効いてない。

いや、チャンスってこれかよ!

何か合図送れ!

俺は喉元で引っ張ると解除を連続でやって、固定してる風にするし

かねえ!

街灯の男が、アハ体験の画像のように徐々に移動したようにするし

かねえ!

くそ! 早く透過を解除しやがれ!

「お前！なにをして……………ぐっ…！」

よし！刺さった！透過を解除した……………はずだ……………。

「ぐっ……………うう。危ねえことするじゃねえの？」

それなのに、やつはほぼ無傷だ。

いや、解除したと俺が思い込んだだけかもしれない。

刺さったと思って、引き寄せを解除したダガーは落下し、あろうことかロデンが掴んでしまった。

自身の透過した腹の中に、手を突っ込んで！

「貴様！どうなってる!？」

は！そうだ！モニム！

モニムはまだダガーが刺さってると思ってる！

今度は早く言うんだ！

「いいえ、すみません！

失敗しました！」

「っな！

そんな!？」

そう言いながら、モニムが顔を上げた瞬間、

「うおら!!」

「ぐっ……………うぐッ!!」

ロデンはモニムの腹を殴り、そのまま拳をあてながら振り回して、出てきた路地裏の方の建物へ凄い勢いでふっ飛ばした。

「モニムさんー！」

モニムは壁から地面へと倒れる。

俺は急いで、モニムの元へ向かった。

「ぐっ……………う……………」

大丈夫だ。まだ意識はある。

だが弾丸のようなスピードで建物に叩きつけられたんだ。

戦うのはもう無理なんじゃないか。

……………取りあえず、回復薬を飲ませよう。

血は出てない。目を開けても大丈夫だ。

「モニムさん。

目……開けます？

これ、回復薬です。意識があるうちに。」

「……………いらねえよ。」

モニムはそう言いながら、立ち上がろうとしている。いらぬいつて……………そんな体で……………

ボロボロなんだぞ。

「モニムさん。無理しないでください！

ここは俺がなんとかします！」

「へえ？なんとかする？」

「あんちゃんが？」

「……………！」

後ろから嫌な声が聞こえた。

真後ろに、俺に影法師をさして。

ロデンが来ていた！

「ずいぶんとなめられたもんだな！」

ロデンは腕を振り上げ、俺かモニムかを殴ろうとしている。

「やばい、なんとか……………は！あれは！」

看板！よくカフェの入口にあるようなチョークでメニューが書かれているあの看板！

あの距離なら！

俺は咄嗟に手を伸ばし、遠くにあるスタンド看板を引き寄せる。

それを当てるんだ！

たぶん木製だが、距離が付いてるぶん威力はある！

「んっ…うおっら！」

ロデンは看板に気付いてしまい、振り上げた拳で殴り、真つ二つに折ってしまった。

ちっ！だが、これでもいい！

俺は手を伸ばし、看板の下半分を引き寄せる。

そして、俺の少し手前で引き寄せを解除し、わざと俺の体にぶつけた。

「ぐわ……………！」

「うう……。」

その勢いで、俺とモニムは少し吹き飛ぶ。やっぱ痛え……………。

だが、少し強引だが、成功だ。

距離は取れた！

「なんだ……………風か!？」

だめだよ〜あんちゃん!!

気をつけなきゃ!」

ロデンは威圧する声を出しながら俺たちの方へ向く。

よし、背中を向けたな。

俺は手を伸ばし、真つ二つにしたときに出た、鋭い木片を引き寄せ
る。

ダガーは失敗したが、これでどうだ!

木片はロデンへと迫り、そして……………

貫通……………いや、通過してしまった……………!!

「なに……………ぐっ……………!」

俺は咄嗟の対処ができず、木片は右手の掌に刺さってしまう。

俺は咄嗟に引き抜き、そこから血が出てきた。

すげえ痛え。

「おっと、あんちゃん。

不幸だな。燃やせばよかったのによお。」

くっ……………だめだ。

勝てねえ。

あの能力……………強すぎる……………!

「貴様、ダガーだ。

そいつを引っ張れ。」

俺が諦めかけたとき、モニムが言った。

「えっ。」

俺は振り向くと、モニムは立っていた。

内臓が破裂してとおおしくないくらいの衝撃を受けながらも、
モニムは立っていたんだ。

普通なら無理するとか言つてとめるだろう。

だが、俺はこのとき、なにも言わず頷いた。

なぜなら、モニムは諦めていないからだ。

「強すぎる能力に絶望するしかないのに、モニムの瞳は明るく輝いていた。」

俺はその輝きにすべてを託す。

「そいつをよこせー！」

俺はロデンに叫びながら血が垂れる手を前に伸ばし、引き寄せる。

「……………う？なんだ？」

ダガーが、俺の手から……………！！」

ダガーはロデンの手から上へ上へと抜けていく。

が、しかし。

「ちっ！逃げんじゃねえ！」

ロデンはダガーをしつかり握り締めてしまう。

筋肉隆々のヤツの力は強く、引き寄せてはいるが、びくともしない。

「なあ、あんちゃん。」

「これやってんのあんちゃんか？」

「……………！！」

やべえ、勘付かれた！

それに、能力を使い続けるのもパワーがいる……………。

もう、体力が……………。

「どうなってるか知らねえが、やっぱりあんちゃんの仕業だろ？」

汗が凄いぜ。疲れてるよなあ。

疲れるとパワーが落ちるよなあ。

ほれ、指3本でも支えられるぞ。」

「そう言つてロデンは俺を馬鹿にするように人差し指から薬指までの3本でダガーを抑える。」

くそ！それでも無理だ……………。

なんとか……………なんとかしなければ……………。

「頑張つても無駄なんだよ！」

この俺の無敵の力に敵うものはいないんだからな！

ガーハツハツハツハ!!」

ロデンは高笑いし、俺を嘲る。

そうだよな。無駄だよな。

俺一人だけじゃ。

「はあっ!!」

「イテッ……い!」

油断しているロデンに、モニムはダガーを掴む手に強烈なキックをお見舞いした。

そうさ!もともと俺の力でダガーを取り返すのが目的じゃない!

奴はダガーを放さないように握っていなくちゃいけない!

だからその握る手は否が応でも実体化させなくてはいけない!

だから確実に、そこに攻撃は届くんのだ!

よし、ロデンの手からダガーが離れた!

「はあ!!」

モニムはダガーを取り返し、間髪入れずロデンを切りつけ

……………

「なっ…!?!」

られない!

ロデンが反応できる前に、手を切りつけたはずなのに……………もう透過させていた!

「ちっ!田舎者があッ!!」

「ぐわあっ!!」

ロデンは怒りに満ちた表情でダガーをモニムから強引に奪い、そしてモニムの体を切り付けた。

「うっ……………ぐ……………ぐはッ……………!!」

モニムは膝を付き、着地はできたが、力が入らないのか立ち上がることはできない。

モニムの体から血が流れる。

血も吐き出し、それを見たモニムの顔は真っ青になった。

やばい!吐く!

そうなると吐き気止めもないし、完全に無防備になってしまう!

「モニムさん！」

俺は手を伸ばし、モニムを引き寄せようとした。

だが、

「おっとーあんちゃん……。」

まだ終わってねえんだよ。」

ロデンはモニムの腕を掴み、それを阻止する。

ちくしょう、なら……！アイツごと！！

俺はロデンごと引き寄せようとしたが、ロデンの体は重くビクともしない。

「あんちゃん!!邪魔しないでくれるかな!？」

「がはっ……!？」

ロデンが俺に殴りかかろうとしたとき、モニムはついに吐いてしまった。

だが、ただ普通に吐いただけじゃない。

自分の腕を掴む、ロデンに対して吐いたんだ。

「おわー何してやがんだーコイツ!!」

しかし、やはりロデンは超スピードで反応し、腕を透過させ、吐瀉物にかかるのを阻止した。

そして、怒りに満ちた表情でモニムを片手で橋の方向へぶん投げる。

「いやっ!!」

「モニムさん!」

モニムの悲鳴と共に、吐瀉物と血液が地面を濡らす。

俺は回復薬を飲ませるためモニムを引き寄せようとしたが、

「うッ……!!」

「……!!?」

ロデンは……トドメとばかりにダガーをモニムへ投げ、ダガーは腹へとぶっ刺さった。

俺はその光景を見て、言葉を失った。

あまりにも惨い。

今の俺には……それしか言えない……。

ただただ幸せが欲しいだけの10代の女の子の未来が、こんな……人を差別し暴力を振るうおっさんに奪われていいはずがない……!!
惨い……惨すぎる……。

「あの田舎者……！」

この俺を足蹴にするだけじゃ飽き足らず、汚物をかけようとするとはな!!

本当なら生け捕りにしようとしたが、死んで当然の奴だ!!」

「……………」

「そういやあ、さつき投げたとき金の音がしたな。

俺への感謝料だ。貰つといてやるか。」

「……………」

「野蛮なギルマドン民め。

地獄で一生贖罪してろ。

生きてきたことにな!!」

「おいー」

このギャンブルクソ野郎!!」

「ああ、あんちゃん？」

なんだって……………」

「ギャンブルクソ野郎って言ったんだよ!!!」

俺の中で、何かが切れた。

俺は手を伸ばし、ロデンにかざす。

「……………!!なに?」

すると、ロデンはすこし浮き、俺に引っ張られた。

俺は咄嗟にさつき手に刺さった木片を拾い、それを構えて向かい打つ。

「くっ!!ぎげん!!」

ロデンも俺の引き寄せる力を利用するつもりなのか、いつでも殴れる体勢で構える。

「ぬわっ!」

それを見た俺は咄嗟に引き寄せを解除し、木片を持って、ロデンへ走る。

ロデンは急な停止に対応できずに転びやがった。
そこへ木片を突き刺そうとした。

「無駄だ！」

が、ロデンは体を透過させる。

だが、それは想定内。

俺はそのままロデンをスルーし、木片を後ろへ投げ、モニムの方へ走る。

まだ死んだとは限らない、薬を飲ませれば、なんとかなるかもしれないええ！

いや、なんとかする！

俺は左手に薬を取り出した。

「ちっ！そいつが狙いかッ!!」

「ぐっ!!」

ロデンはそれを見逃さなかったか、木片を俺へと投げ、左手に刺した。

引き寄せるのに使えればと思ったが、失敗だったか……！

痛みで俺は、薬を放してしまう。

ガラスでできた薬のビンは割れ、中の液体が溢れる。

ちっ、だが、薬はもう一つある。

それを飲ませれば！

そう思ったとき。

「……………ツ!?!」

俺の後頭部に、なにか硬いものがあたった。

衝撃で俺は転ぶように前へ倒れてしまう。

幸い、何かが割れる感覚はなかった。

「あんちゃん。あんちゃんだけは許してやろうと思ったが、少し気が変わったぜ。」

後ろから怒気のこもったロデンの声が聞こえる。

ちくしょう、あと少しなのに……。

俺は立ち上がり、走り出そうとした。

そのとき、大きな手が俺の頭を掴んだ。

「おっと、いかせねえよ！」

あんちゃんも昨日、俺の手に攻撃したよな？

そのつけがまだ残ってんだよ！」

「ぐわー！」

ロデンはそう言いながら、俺を建物の方へ飛ばす。

俺は建物へと打ち付けられる。

すげえ、痛え。

背中がおかしくなりそうだ……。

「あんちゃん！安心しな！」

この田舎者の息の根を完全に止めたことを確認したら、同じところに連れてってやるよ!!」

ロデンはそう言いながら、足音を立てながらモニムへと近づく。

もう、だめなのか……。

……いや、だめじゃない。

さつき、割れたガラスの破片との直線上に、ロデンがちょうど重なっていた。

俺は手を伸ばし、大きなガラス片を一枚引き寄せる。

一枚が限界だった。

「……………っあんちゃん!!」

それほど死にたいようだね!!」

しかし、ロデンはまた体を透過させ、ガラスはすり抜け、地面へと落ちてしまった。

くそっ……………しよせん悪あがきにしかないのか？

「これ以上、体力使いたくねえしよお！」

あんちゃんを先に始末するしかねえなあ!!」

ロデンはそう言いながら、俺に向かって歩いてくる。

ふっ……………なんだ。

俺……………もう死ぬのか。

1日とちよっとしかいれなかったけど、この世界……………楽しかったな。

……………!!

そのとき、俺は目の前の光景を疑った。

モニムが……………モニムの手がピクリと動いた。

顔も上げた……………俺の方を見ている。

なにか伝えたいようだ。

手……………この動き、俺の能力……………。

……………そんなこと言っても、能力を使う体力は……………。

体力……………？

そういや、ロデンは言っていた、*“体力を使わせるな”*と！

まさか！ふつ……………これが真正銘、最後の悪あがきか……………。

失敗したら死ぬんだ……………やるだけやってやる!!

俺は最後の力を振り絞り、手を伸ばし、ガラス片を引き寄せる。

「あんちゃん！

まだ抵抗するのか!?

俺、分かってるんだぜ？あんちゃんが手を伸ばせば何か飛んで来

るってことはよお！

ほら、こんな風に……………?」

ロデンは目の前に何かが通らないのを不思議に思ったのか、怪しそ

うに後ろを振り返り、その後俺を見た。

「なんだよ……………?はったりか……………?」

……………ぐほ……………ぐつ……………!!

なんだ、こいつあ!!」

よし、一瞬あいつは解除した。

そのときに俺が何をしたかわかったはずだ。

「あんちゃん！俺の体の中で固定しやがってるな!?!」

そのとおりだ。

今ので、やつの内臓のどこかを傷付けたはずだ。

さあ、どう出る??

「ふっ！あんちゃんいま、俺の体のどこかを傷付けたと思っただろう

?」

……………え?

……………そういえば、最初るとき!

喉にダガーが刺さったとき、無傷だった！

まさか！

「ガハハ!!」

能力つてのは才能なんだぜ？

天から授かった、生まれ持った能力だ!!

だから影響がない程度にほんのちよつと刺激を受けた程度で、勝手に能力が発現してくれるんだよ!!」

チツ!!

やつばそういうことか！

反射行動………熱いやかんに手を触れたときに思わず手を引っ込めるように、能力が出るのか………。

「ガハハツ!!」

そうかそうか、狙ってたのに残念だったな!!

いいだろう。あんちゃんはギルマドン民じゃねえからな!!

その固定したり引っ張ったりする能力を疲れきるまでやれよ!!

昨日のように炎を出してもいいんだぞ？

特別にきれいな最期をおくらせてやるよ!!」

ロデンは大笑いし、俺にそう言う。

能力によつぽど自信があるみたいだな。

いいだろう、限界までやってやるよ!!

「フーン!と言いつつも、疲れるからやめた………ん?」

ロデンは移動しようとしたが、気づいたようだ。

俺が仕掛けた罠に。

「あんちゃん。やるね。

包囲網か?」

「ああ。ガラスの小さな破片を俺を中心とした半円のように横にズラツと繋げた。

これでお前は俺に近付けない。

お前はすでに体力比ベをする運命だったんだよ!」

よし、言つてやった。

これでどうだ。やつ性格上………

「ガハハ！いいだろう！

ギャンブルは好きだぜ！

チツプはそれぞれの魂ってか!?」

乗った！あとは俺の体力次第……!」

もう結構体力ギリギリだが、踏ん張るんだ……!

引き寄せ、解除、引き寄せ、解除。

それだけだ。

それだけをやれば、勝てる！

許すことができないあいつに……!」

「おい……あんちゃん……。」

あんちゃんのガラス片……少し俺の腹から出てきてるぞ……?」

……!」

しまった。

ガラスは完全に固定できるわけではない。

少しずつ俺の方へ引き寄せられているんだ。

このままじゃ、無意味になる……!」

これで終わりかよ……!」

そう思った瞬間、

俺の体力はつき、引き寄せていたガラスは一斉に地面へと落ちた。

俺は希望にすぎり手を伸ばす。

「終わりだな……。」

じゃあ……死ぬ……!」

しかし、ロデンは拳を振り上げ、俺を殴ろうとした。

そのときだ。

「死ぬのはテメエだ……!!」

「ッ……!!」

なに……!」

ロデンの後ろから、モニムがダガーで刺した。

俺が引き寄せたんだ。

「くそーだが無駄だ！

透過……できない!」

ロデンは体を透過し、切り抜けようとしたが、無理なようで焦りの表情が見えた。

「お前の能力は強え。」

「だがな、能力つてのは体力がいるんだ。」

いくらそんなに筋肉つくくらいトレーニングして体力つけても、透過を何度も長時間できるはずがない!」

「モニムが力強い声と目付きで言う。」

「出血がひどいはずなのに、よほど怒ってるんだろな。」

「この田舎者があ!!」

「……………!?なに!!?」

ロデンは腕を後ろに回して、モニムを殴ろうとしたが、腕が動かず、困惑している。

「俺が腕を引き寄せているから。」

「俺もモニムと同じだ。」

「怒っている。」

「俺は体力が限界になったから止めたんじゃない。」

「モニムのサインがあったから止めたんだ。」

「お前の邪魔はさせねえよ!」

「本当はすげえキツかったが、ヤツが悔しがらるならそれでいい。」

「バカな!!俺の能力は最強のはずだ!!」

「こんな……………こんな田舎者とあんちゃんなんか……………!!」

「お前はその能力を過信し、慢心した。」

「それがお前の敗因だ。」

「これまでお前が殺した人……………そしてその家族の分」

「地獄で一生贖罪してろ!」

モニムは冷酷な声でそう言いながら、ダガーでロデンの体をえぐり、切り裂いた。

モニムは横顔に振り返り血を浴びながら背中を向け、いつものことを聞く。

「貴様。やったか?」

「俺はあまり見たくない感じがするエグく深い傷を見て、モニムの赤」

く染まった背中を見ながら言った。
「ええ。やりました。
俺たちの勝利です。」

草原での一幕

勝ったんだ……。

俺ら……勝ったんだ……。

深く抉られた背中から血を流し、地面へと倒れ伏す、2 m近くある巨漢を見ながら、俺は思った。

まだ意識はあるみたいだが、いずれ死ぬだろう。

しかし不思議と、罪悪感はなかった。

多分、怒りのせいだろう。

希望の光が見え始めた少女を鬱憤晴らしのために利用したことへのな。

「貴様、回復薬をくれ。」

そう思っていると、モニムは俺に背中を向けたままそう言い、真っ直ぐ手を伸ばした。

……。あの女、目を瞑ったままで俺の位置分かってないな。

いやまあ、返り血も浴びてるだろうしそうするしかないだろうから仕方ないか。

「モニムさん。こっちですよ。」

俺はそう言いながら、袋から回復薬を取り出してモニムへと歩み寄る。

「分かってる。」

なるべく動きたくない。貴様の方から回り込め。」

「わかりました。」

確かに怪我人だし、動かない方がいいか。

俺もそうだけど、モニムのよりかは全然マシだ。

てかホントに分かってたのか？

モニムのことだから、屁理屈いって誤魔化したんだろうな。

俺はそう思いながら回り込み、モニムの前に立った。

「はい、回復薬です。」

「蓋、開けますか？」

「ああ。頼む。」

俺はビンの蓋を開けようとしたが、スゲエ固え。

それにさっきの戦いで疲れと右掌と左手の手関節後面あたりが怪我してるから力が入らねえ。

「うぐぐッー」

裾を使って、痛みを我慢し、ようやく開けられた。

ああ、固かった……。

今度からは手を怪我しないように慎重に行動しよ。

俺は開けるときにビンについてしまった血を拭き取り、ビンをモニムに渡した。

モニムは縁にやわらかそうな唇を当て、回復薬を飲もうとしたが、何を思ったかやめてしまった。

そして、まだ薬が一杯入ったビンを俺に押し付けようとした。

「貴様が飲め。」

薬は一つしかないんだ。」

「え？」

なぜ急にそんなことを？

この女、自分の体のこと分かってんのか？

腹を殴られたり、壁に投げられたり、体切られたり全身ボロボロじゃねえかよ。

こうして立っているのが不思議なくらいに。

「いえ、モニムさんが飲んでくださいよ。」

もう口付けたじゃないですか。」

「飲まなくても平気だ。」

「平気って……モニムさんの方が重症なんですよ？」

「私は平気だ。」

貴様の方が能力使って疲れてるんだろ？」

モニムは平気平気の一点張りで引こうとしない。

目を瞑って視界の中、手で俺を探って押し付けようとしてくる。

確かに疲れてるけども、全身血塗れの少女の前で、大人の男がじゃあ頂きますってできると思うか？

さすがに無理だろ。

「……………貴様。」

私…………目を開けていいか？」

「はい？」

「だから、目を開けていいかって聞いてんだ。」

？

いきなりまた何を。

「少し待って下さい。」

とりあえず、モニムの視線の先に血がないか確認する。

俺の体は…………さっきの右手と左手くらいだけだな。

モニムは…………うん、首の下からは真っ赤だ…………。

しかも吐瀉物も少しかかってんじゃねえか。

後で着替えさせねえと体に悪いんじゃ。

「待ったぞ。いいか？」

確認している途中なのに、モニムはそう言って目を開けようとした。

短気な女だ…………！

「ちよつと待って下さい…………。」

まだ左頬に。」

俺は慌ててモニムを止めて、ハンカチで左頬の多分ロデンの返り血を拭き取る。

うげえ、なんか肉片みたいなのあつたぞ。

俺もちよつと吐きそう。

「取れたか？」

「ええ、完全ではないですが…………。」

あと、モニムさんの首から下は見ないでくださいよ。」

「ああ。」

モニムは空返事のように言うと、ゆつくりと恐る恐る目を開いた。こうして見るとキレイな目をしてるな。

そう思っていると、モニムはさっきまで俺に押し付けようとしていた回復薬を、飲み始めた。

姿を見て俺の怪我が大したことないってことがわかったのかな？

これでモニムは助かるんだな。

体のいたる所が痛いけど、モニムが無事ならそれでいい。

「なにニヤついてんだよ。」

ほら、貴様も飲め。」

「え?」

俺は呆気に取られた表情でモニムを見て、それからビンを見た。

ビンの中にはまだ半分くらい薬が残っていた。

「いいえ。」

モニムさん、全部飲んでいいんですよ。」

「全部飲むかどうか決まるのは私だ。」

「ですが、半分だけって……その、中途半端に回復することになるのでは?」

「……確かに、貴様が言う通り完璧に治るってわけではない。」

ほら、そうじゃん。

だから、モニムが全部飲めばいいって。

俺は明日になれば新たな能力使えるからそれで回復すりゃあいいしや。

今、まだ朝の7時だけど。

「貴様。約束したよな。」

「何をです?」

いきなりなんだ?

なんか回復薬で約束したようなことあったっけ?

水筒の水感覚で飲むくらいしか言われてないよな。

「何をじゃねえよ。」

願いを叶える手伝いをするって。

貴様が言ったことだろ。」

「……………」

ええ、ですから、その願いの主であるモニムさんが飲むべきでは。」

「……………はあ、ホントに貴様は察しが悪いやつだな。」

え?なに?

また呆れられてる。

察しって？

何を察しろと？

「これは『契り』だ。」

貴様はナライ・フォーさんの話を聞いても結局よくわからない。

だが、まあ……なんだ、その……少しくらいは役に立つからな。意外と勇気だけはあるし。

……だからほら、飲め。」

モニムはちよつと照れくさそうに顔をそらしながら言った。

「モニムさん。」

俺は気付くとモニムからビンを受け取っていた。

なんかよくわからないけど、仲間として認めてもらえた。

そんな気がする。

……契りか。

杯を交わすみたいでかつこいいな。

一度やってみたかったんだよな。

「じゃあ、いただきます。」

俺はそう言うと、ビンの中の薬を飲んだ。

飲んでる途中で、間接キスじゃないかと思っただが、ムードに合わないため、早急に振り払った。

ただ、この薬結構苦いな……。

飲み切った後も口に苦味が残る……。

飲み物なのに粉薬を飲んでるようだ……。

「ありがとうございます。」

「礼はいらん。」

あと、瓶はまた袋に入れておけ。

よくわからない能力から足がつくかもしれないからな。」

「はい。」

俺は言われる通りに空瓶を袋に入れた。

そのとき、その腕の動作が飲む前よりスムーズに感じた。

良薬口に苦しとは正にこのことだな。

こんなに早く効果が出るとは……この世界凄いな。

「ほら、行くぞ。」

早くいかないと面倒くさいことになりそうだ。」

「面倒くさいこととは？」

俺が質問する前に、モニムはもう橋を速歩きで歩き始めていた。

本当にせっかちな女だな。

まあでも、歩行速度もいつも通りだし、足を引きずる感じもないし、モニムも回復できたんだな。

「ロデンにはまだ仲間がいるはずだ。」

アイツは性格はどうしようもねえクズだが、能力は強いからな。

普通なら、すでに私達を片付けて連絡寄越しているような時間だし、異変を感じてここに来るかもしれない。」

「仲間……ですか？」

仲間？

あいつがか。

あの自分以外の生物すべてを見下しているようなやつが？

「ああ。アイツはあの街灯に化けていた男に対し、アイツじゃない誰かが雇った風な口だった。その雇い主もどうせ金の付き合いだろがよ。」

そんなくらいしか確証はねえが、ビビンニから出るに越したことはない。」

「なるほど。」

確かに、そんなこと言ってたような。

まあでも、どんな理由つけてもここからは出たいよな。

ナライさんのようにいい人はいるけど、なんか嫌なところだったしな。

その後、俺たちは橋を超え、草原を進んで行った。

道中、特にこれといったことはなく、モニムも口を利くような感じじゃなかった。

気まづくはないが、認められたと思ってたから少し寂しいな。ビビンニから出て30分くらいした頃、行商人の店が見えた。

まあ、店と言っても荷台になにか布みたいなのが入っていて前に立って看板が立っているだけの簡素なやつだけだ。

「貴様、少し寄るぞ。」

「あそこに……ですか？」

「……他になにがある？」

いや、そうだけど……一応。

見るとあそこは服屋のようだな。

やっとこれで血塗れのモニムの服が着替えられるな。

モニムもずつと首を少し上に向けて疲れてるだろうし。

「おお、お嬢ちゃん。奇抜な格好してるね。

でもそれじゃあウケないよ。」

服屋に少し近づいただけで、店主であろうなんかチャラそうな男性が話しかけてきた。

どこの世界も服屋はそうなんだな。

「ああ、そうだな。私も好きでこんな格好してるんじゃないんだ。

だから少し、見させてもらうぞ。」

モニムは店へ歩きながらふてぶてしく店主に言った。

これはぶりっ子使わないんだな……。

「ええどうぞ。是非堪能してね。」

この僕、シミール・デエタのコレクションを。」

そう言う店主——シミール・デエタは指で四角を描き、そこに現れた四角い光を拡張し、横に広げた。

それはまるで、空中に浮かぶスクリーンのようなものだ。

ステータス……じゃないが、それに似たようなものかな。

なんかスゲエ！

本当にワクワクするなこの世界は。

「貴様。ブーツとしてないで貴様も探せ。」

「俺も……ですか？」

「ああ。」

……あ、罵りはなしか。

言われてみれば、服は今着てるのしかないし、買った方がいいかも

な。

アイツとの戦いで汚れたしな！

そう思いながら俺はスクリーンを見た。

おお。すげえ。

スクリーンは色々な洋服のデザインが表示されていた。

格好いいものかなカワイイの。

無難なものから奇抜なもの。

何でもありって感じだな。

「検索もできるから、自分の好みにあつた服を選んでね。」

「はあ、ありがとうございます。」

検索……これか。

確かにバリエーションもあるからスライドして探すのも大変だしな。

てか、このスクリーンって能力なのか？

それとも商人登録的なことをしたら受けられるようなやつ？

まあ、難しい話はいいか。

「貴様、値段は気にするな。」

金はたくさんあるからな。

服もたくさん買った方がいいだろう。

道中何があるか分かんねえし。

そうだな……3着くらいでいいぞ！」

「は、はあ。」

なんか凄い大きい数出しました的な感じで言われたが、3着って

……多いか？

いや、モニムの格好……よく見るとほつれてるところ多かったり、縫ったあともあったりするからな。

モニムにとつては3着でも十分に多いのか。

「貴様。私じゃなくてスクリーンを見る。

気が散る。」

「は、はい。すみません。」

そうだな。とりあえずみよう。

値段は気にするなと言われたが一応どのくらいか……………つて
なんだこれ。

忘れてた。俺、この世界の文字読めないんだっただ……。
数字の数え方は同じだから行けると思ったのに、だめじゃないか！
それに文字わからないから検索もできねえ！

ああ、これは詰みだ。

「お兄さん。項垂れちゃってどうしたの?」

膝を付く俺に店主のシミーレが話し掛けてくれた。

さすが服屋の人!

「あの、すみません。」

実は……………」

いや、ちよつと待て。

そこまで言っただけだが、文字分からないっていうのメツチャ恥ず
い!

この世界の識字率ってどんくらいなんだ!?

低いなら別に大したことはなさそうだが、高かったら大の大人が文
字読めないってのは、ちよつとキツイぞこれ!

「貴様、私は選り終わったぞ。」

早くしろ。」

はっ!? モニム! ベストタイミング!

「いや、すみませんなんでもないです。」

「そうか、じっくり嗜みなね。」

「はい。」

モニムなら俺が文字読めないって確かわかってたはずだ!

それにもうだいたい慣れたからモニムになら販まれても構わないし。

「モニムさん。あの。」

「なんだ。」

「文字読めないので代わりに検索してもらってもいいですか?」

モニムは俺の言葉を聞くと、呆れたような表情をしたあと、俄にス
クリーンを操作し同じ赤いシャツを3つ選んだ。

「面倒だからこれでいいな。」

「え、俺の選んだんですか？」

「ああ。文句あるか？」

「……いや、ないです。」

圧に負けてないとはいったが、同じ服って……。

それに無地な赤シャツって……。

いやまあ、血がついてもわかりにくいけどさあ。

もうちよつとバリエーションあってもよくない。

「ズボンは？」

「一つくらいは。」

「あそ。」

モニムはそう言うと、黒い長ズボンを選択した。

ああ、隣のベージュの方がよかったな。

「これをお願いします。」

「はいよ。」

結局決まっちゃったな。

まあ、モニムと一緒にいる限り俺に決定権はないか。

「へえ。どっちも赤いシャツに黒い長ズボンね。」

パールツクにしては地味だけど、そこはお客さんのセンスに任せるよ。

僕は一人一人のセンスを重視したい性格だからね。」

シミールはそう言うと、荷台から赤と黒の布を取り出した。

そして、その布に手をかざすとハサミとか糸とかがひとりでに動き

出して、その場で選んだ洋服を誂え始めた。

すげえ。これも能力か？

………てか、モニムも俺と同じ赤黒なんだ。

年頃なんだし、もつとオシャレしたくはないのかな？

しばらく待った後、頼んだ洋服が完成した。

早速着てみたが、こりやすごい！

サイズを測ってないのにピッタリだ。

それにとっても動きやすい。

「凄いですね。

ピッタリですよ。

見ただけでわかるんですか？」

「そうだね。僕にはその力があるからね。」

俺の質問にシミーレはさも当たり前のように言う。

力……やっぱり能力なのか。

そういえば、能力って軽く明かしていいもののかな？

そこらへんの基準を知りたい。

ちよつと聞いてみるか。

「あの、差し出がましいようですが、シミーレさんのその……能力って
いうのはどのようなものなのですか？」

「僕の能力かい？」

今見せた通りさ。

僕の脳内のイメージをスクリーンに投影し、君らお客さんを選んで
もらう。

その選んだファツションをその荷台の布から作る。

そして僕はみただけで身長や胸、腰、尻のサイズがわかる。

それが僕の能力、*“着せ替え”*だよ。」

「へえ。ありがとうございます。」

意外とすんなり言ってくれるんだな。

名前みたいなものなのかも。

積極的に自分から明かさないけど、聞かれたらすんなり言える的
な。

「おい、そんなやたらに聞くなよ。」

そんなこと考えてると、着替えを終えたモニムが呆れたように言っ
た。

俺はその言葉の意味を尋ねようとしたが、着替えたモニムが結構可
愛くて思考が止まってしまった。

なんだよ、格好は俺と同じ赤い服に黒いズボンだけど、そこに黒い
スカジャンして、なんかストリート系みたいだな。

髪もショートボブだし、ボーイツシュでかわいい。

「長かったね。」

「気に入ってくれたかい？」

「ああ。」

「動きやすけりや、それでいい。」

「モニムは面倒くさそうな口調で、ダガーの鞆がついたベルトのようなものを胸に巻く。」

「あまり胸はないな………：発展途上か……？」

「………：つて俺、何考えてんだ。」

「そうか。」

「僕の芸術は凡人にはわからないからね。」

「柄はシンプルでも、君たちの体型を考えた………：」

「私達、急いでるんだ。」

「はやく精算を済ませたい。」

「全部でいくらだ？」

「シミーレが自惚れてるように解説しようとしているのを、モニムが睨みながら止めた。」

「逃つてもらったんだから、もう少し礼儀よくしようよ。」

「ああいうタイプ苦手なのかな？」

「ソーリー。」

「お嬢ちゃんにはまだ僕の芸術は早かったかな？」

「お代は金貨10枚でいいよ。」

「金貨………：10枚………：」

「モニムは値段を聞いた瞬間、ドキツとした表情をし、金貨が入った袋を開けて、金貨を1枚1枚丁寧に取り出す。」

「まだこの世界の基準はわからないが、金貨10枚って、凄い価値なんだろうなー、きつと。」

「だがまあ、俺たちにはナライ・フォーさんから金貨をたくさん貰ったから、十分余裕があった。」

「ほら、10枚。」

「きつちりあるぞ。」

「モニムもこれ見よがしに金貨を渡している。」

普段使わない大金使って、背伸びしてるみたいでかわいいな。

「ちやんと10枚。

まいど。

また僕のコレクションが恋しくなったらおいで。」

「……………」

「……………ありがとうございます。」

シミーレはキザにいうが、モニムは無視。

とりあえずお礼はしたが、なんか後味悪いな。

「モニムさん。もつとこう、愛想よくできないんです？」

「貴様こそ、ヘーコラしすぎだ。

ずつとペコペコ頭下げて、気持わりい。

反吐が出る。」

モニムは俺を睨みながらそう言い、脱いだ服と買った服を別々に入れた紙袋を二つ、俺に押付けた。

本当に今のモニムは機嫌が悪いな。

それに睨んだときのあの目、殺気が立ち過ぎてて怖かったー……………。
……………しばらくそつとしておくか。

それから1時間くらい経ったかな。

だいぶ歩いたが、まだゴルフにはつかない。

さすがのモニムも疲れたのか、少し休憩することにした。

はあー！やつと休める……………。

ほんと、俺も老けたな……………まだ20代だけど。

にしても腹減ったな……………。

あ、確かモニムがドウエスなんとかの肉を持ってた筈だ…。

モニムは確かあの木の裏にいるはずだ。

ちよつと貰いに行くか。

俺は小腹を満たそうと、木の裏にいるモニムのところへ向かい、話し掛けようとした。

だが、木に近付いたとき、嫌な予感がした。

なんだ……………この二オイ。

吐き気がしそうな……………吐き気……………！
まさか！

「モニムさんー！」

俺はまさかと思い、急いでモニムの様子を確認した。
俺の予感は的中していた。

モニムの顔は真っ青で、唇は白い。
地面にはかなりの量の吐瀉物がまかれていた。

「モニムさん……………大丈夫ですか？

いったい何が……………？」

「うるせえな……………はあ……………」

あっちいつてろ……………」

俺は心配して、モニムの背中を擦ろうとしたが、モニムはまた俺を
睨み、邪険にあしらう。

だが今回ばかりは下がることはできない。

すごく辛そうじゃないか。

「できません。

俺はモニムさんのメンバーですよ。

こんな辛そうな姿を見て、放っておくなんて酷いことはできません。
ん。」

「だから……………はあ……………はあ。

うるせえって……………言ってるだろ。

本当に……………貴様は……………」

うツ……………」

お、おい。

大丈夫かよ……………」

いや、大丈夫じゃないよな。

なにか、袋とかあれば……………」

もう手遅れだろうけどさすがに地面へ直は衛生的に悪すぎる。
気分がよくなっても、ニオイで再発しそうだし。

俺も少し吐き気がするしき。

「がはっ……………」

ああ、ついに吐いてしまった……。
大丈夫かよ。

これで何回吐いたんだ？

………つて、ん？

モニム……両手になにか持つて………

つてこれ、ダガーとなんかの布………手入れしてたのか。

それでダガーの血を見て、吐き気を……。

「モニムさん、ダガーの手入れくらい、俺がやります。

モニムさんは少し風当たりのいい場所で休んだ方がいいですよ。」

「はあ………はあ………。」

くらい………。

貴様………。

「くらい」とはなんだ!!」

「えっ………ちよ、モニムさん……!?!」

モニムは怒りに満ちた表情で素晴らしい、ダガーを俺に向けた。

また俺、なんか変なこといつたのか？

「貴様はもう何も言うな！」

メンバーとはいうが、親しい間柄でもねえただの同行者だ。

無知なんだから、戦い以外では役に立たねえんだから、私の言うこ

とだけを聞いて、あとは突っ立ってさえいりやあいんだ!

さつきそう契りを結んだはず………

うッ………がはあっ………。」

「モニムさん………。」

怒りで興奮したからなのか、モニムはまた嘔吐した。

でも俺は、可哀想だとか心配だとかの感情より怒りの感情の方が強

くでていた。

確かに俺はこの世界に関しては無知だし、下手な行動はとりたくない。
い。

それにモニムへの恩はあるが、さすがにもう我慢の限界だ。

身勝手すぎる。

プライドが高く、大切なものを貶されたと勘違いしたと思っても、

あそこまで人に暴言を言っている理由にはならない。

俺は手のひらをダガーに翳し、引き寄せようとした。

「な……………なにをする!？」

モニムは抵抗するが、嘔吐で衰弱した体では力が入らず、ダガーは俺の手元へ渡った。

「モニムさん。移動しますよ。」

風が当たる場所まで。」

俺は素晴らしいながら、モニムの腕を掴み、引つ張ってでも連れて行くとした。

「離せ！」

貴様！聞いてなかったのか!？」

それにダガーも返しやがれ!？」

案の定、モニムは抵抗する。

でも俺は引き下がらない。

モニムは思っていたより力が強かったが、弱っていた。

俺は黙ったまま、モニムを風通しの良いところへ連れてきた。

散々騒いでモニムは俺を睨んだまま黙って呼吸を整えている。

「ダガーは返しますよ。」

形見なんですよね?」

「……………」

モニムはうんともすんとも言わない。

うーん、どうしたものか。

……………そうだ、ダガーについている血だけ引き寄せるってのは……………お!できた!

とりあえず、手のひらにつけかないように慎重に引き寄せて……………よし、地面へ垂らせたな。

思ってるよりこの能力便利だな。

最初から気付いていれば服を変える必要なかったかもな。

「モニムさん。ほら、ダガーです。」

しっかり取ってありますよ。」

俺はキレイに血が取れたダガーを差し出す。

モニムはちらりと見ると、ひったくりのように奪い取った。

モニムはダガーをじっくりと見て、鞘にしまうと、尻目で俺を見た。

「さつきは取り乱してすまなかった。」

少し気分がよくなった。先へ進もう。」

モニムはそういうや否やあるき始める。

たしかに顔色はよくなったが、足がすこしふらついていて、歩き方に元気がないような気がする。

なぜああまでして見栄を張るんだ……………。

プライドが高いとか性格の範疇を超えている。

「モニムさん。もう少し休みましょう。」

まだ治りたてですし、無理しないほうが。」

「……………無理なんかしてねえよ。」

それに今ここで休んでたんじゃねえ。

ここから先で戦うかもしれねえからその準備をしてただけだ。」

「戦い？」

戦いつて？

なんの。

ここから先は深い森だが、なんかいるのか？

ヤバい民族とか。

「ここから先はゴルムの森だ。」

そこいるのは……………」

そこまで言つて、モニムは急に座り込んだ。

片手で軽く頭を抑えている。

「モニムさん？大丈夫ですか？」

「ああ…。少しクラつときただけだ。」

もう平気だ。」

そういいながらモニムはまた歩き出そうとしている。

やっぱ回復できてねえじゃん。

疲れによる立ち眩みかな。

言っても聞かないし、こうするか。

俺はモニムに向かい手を伸ばした。

「うわ。」

「……………貴様。なんのつもりだ。」

「モニムさん。やっぱりまだ疲れてるんですよね。もう少し休憩しましょう。」

「……………そうか…。」

貴様。意外と体力ないんだな。

いいだろう。貴様が使えないと話にならないからな。特別に休ませてやる。」

「え……………あ、ありがとうございます。」

え……………何この流れ？

ツンデレ？

……………まあ、休みたいだし、結果オーライか。

その後俺たちは30分くらい木の陰に何も話さず、ただじつと座ったりドウエスの肉を喰ったりしながら疲れをとっていた。